会報

特輯号

《No.10》

たたかい終って35年
長くもあり、短かくもあるが
われらの人生に親睦と慰霊の
時は充分あると思う

陸海空・東部ニューギニア戦友会

ごあいさつ

東部ニューギニア戦友会長　杉山　茂

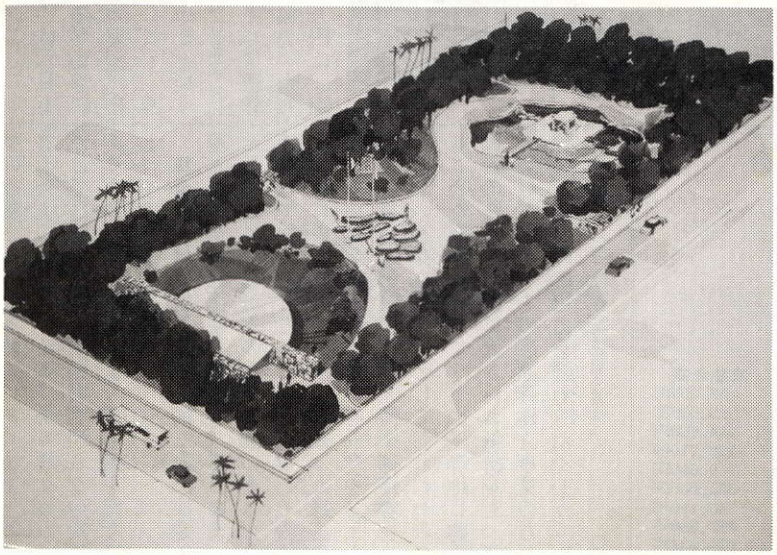
私はよく旧知の上司や戦友から云われる。「第十八軍（勿論海軍、航空軍部隊も含んで）は今に至るも実に団結強固だなァー」と、私はその都度内心ニヤリとするのが常だが、事実そのように感謝している、あれだけ生死の境で苦楽を共にすれば、その想い出も感激に満ち今となってはすべてが誇りとなり、時が過てばたつ程懐かしく、戦友同志で何度でも会って思い出をくり返してみたい、戦友ならばツーと云えばカーと通じて楽しさも格別と云うことで自然と団結が醸し出されるのだと思う。若し夫れ船工五連隊のように部隊長が現存される部隊であるならば、その団結も一層強固であろうことは当然であり、部隊長を失った部隊からみて羨望に耐えない次第である。そんな我々でも戦時の記憶は、年と共に薄らいでゆくので時々は相寄り復習しなければ終りには忘却の彼方におき去られるであろうと憂慮せられる。

この会報はそうしたことのためにも記憶を蘇らせ、共感をどよもすよすがとなるであろう。会報も早や十号を数えるようになった。幹事や戦友各位の誠意や労苦に深謝してやまない。われ〳〵生存者は、あの苛烈な地獄の業火の中から奇しくものがれて生きる喜びに浸っている今日を感謝していない人はおるまい。特に安達軍司令官の陣頭指揮のもと、挙軍一体、乾坤一擲を期して真に死力を尽したアイタペ決戦が軍の団結に及ぼした成果は測り知れないものがあり、これを敢行したわれら戦友の誇りは、今に忘れ得ぬ共通の感激であろう。われ〳〵生存者の感激と誇りにつき忘れられぬものは、尊い十三万にも及ぶ犠牲者のことである。

熾烈なる砲爆に散華し、マラリヤ栄養失調に仆れたこれらの屍を乗り越えて生き残ったわれ〳〵であることは、運命とは云えよくも生きているものよ。との感慨を深くせざるを得ない。散華した英霊が文字通り水漬く屍、草むす屍となり、ニューギニアの土と化した今日でも、故国の人の訪れを待っているであろうことは、会報第九号に投稿された大阪の戦友富岡伊三郎氏の文面に見るも明らかである。といった次第で今戦友会としては、西部ニューギニアにおける遺骨の収集と、ニューギニア全戦域に対する慰霊碑建立が残された義務と云うことになるが、前者は現地の治安状況からして当面目算が立たないので、慰霊碑建立が唯一の目標となる。幸いにして政府はこのため財政困難な折柄にも拘らず、六千万円の支出を決定し、現地でもウエワクのわが軍の上陸地点附近に公園を造り、その中にわが慰霊碑を建立することに同意してくれていることは勿怪の幸いである。英霊の呼び寄せと云わざるを得ない。只、問題は政府支出の金額ではどうしても不足するので少なくとも千五百万円～二千万円は戦友会で援助してほしい、との政府よりの申し出である。

戦友会より前記金額を拠出することは容易なことではない、かと云ってこれが出来なければ所望の建碑は不可能である。折角の企画をわれ〳〵生存戦友の努力や誠意の不足により台なしにも出来ない。そこで生きて帰れたものの義務として戦歿戦友を想い可及的多額の拠出をお願い致し度い、従来の例から云えば全額を生存戦友の浄財によるのが常道のようであるが、念のため全生存戦友と遺族に周知せしめ、且つ地域によっては地方団体にも通知し、出来ればその協力を仰ぐ方法も考慮せざるを得ないのではないか、と思われる。

募金の方法については別に具体的に決めた上で連絡されるが、ニューギニア戦友会の団結が他から賞讃されていることを明示するためにも誠意と熱意を以て本件に関し努力されるようお願いする。



⇧ニューギニア・ウエワク旧揚陸場跡に建立される慰霊公園予定図全景

ウエワク慰霊碑建立実現とこれに対する協力のお願い
——会務報告に代えて——

代表世話人　**田中兼五郎**

昨昭和五十四年におきましては、東部ニューギニア戦友会として四年目ごとに実施することになっている合同慰霊祭を四月十五日靖国神社で盛大に実施し、生存戦友の慰霊の微哀を捧げることができましたのは、お互いに心安まる思いでありました。また第十八軍司令部としては、各部隊の絶大な御協力を得て、故安達軍司令官閣下の三十三回忌を九月九日九段会館で執り行ない得ましたのは、長年の心のつかえを取り除くことができたような思いでありました。しかしながら先回の会報第九号で報告しました東部ニューギニア戦友会としての二つの大きい残務、すなわち東部ニューギニアにおける慰霊碑の建立と、西部ニューギニアの遺骨収集に対する協力はいずれも実現の運びにならなかったのであります。

元来東部ニューギニアの慰霊碑はウオム岬の突端に建設することとして昭和五十一年度の政府事業（当時の予算は四、〇〇〇万円）として計画されたものでありますが、建設用地の土地問題が解決せず、予算が流れてしまっていたものであります。ところがその後、厚生省、在ポートモレスビー日本大使館、東セピック州知事等の尽力により別の建設用地を取得できることになり、日本政府としては改めて昭和五十五年度の事業としてこの慰霊碑建立事業を再行することに決定を見たのであります。

新しい建設用地は阿部岬（ボーラム岬）とウエワク半島の間の海岸道の南側地帯であります。東セピック州政府としてはこの地域をウエワクの文化施設地域として開発する計画のようで、日本の慰霊碑施設がその皮切りに選定されたもののようです。われわれ戦友としてもいろいろな意味合いから、ウオム岬の突端よりははるかに立地条件が好ましいように考えられます。

慰霊碑施設の設計の細部は目下厚生省でつめている段階ですが、その大体の構想は別掲の完成予想図の写真のとおりです。慰霊碑とそれを取り巻く日本式庭園、及びこれに隣接する野外音楽堂の三つが基本です。日本式庭園と野外音楽堂とは、この地域を文化施設地域にしたいという東セピック州政府の希望にこたえたものであります。

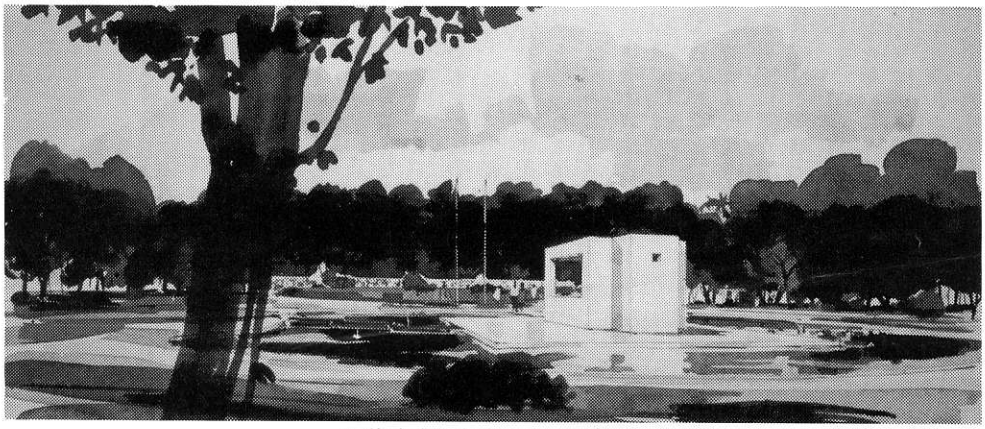
さて予算でありますが、厚生省がこの事業のため大蔵省から認めてもらった額は六、〇〇〇万円であります。この額は過去最高で、フィリッピン、サイパン、ビルマはそれぞれ四、〇〇〇万円、現在建設中のラバウルは五、〇〇〇万円であります。大蔵省としても日本式庭園や野外音楽堂の追加ということも考えて六、〇〇〇万円にしたものと想像されます。野外音楽堂は前例がありませんし、庭園についてはフィリッピンの一例があるだけであります。

そこで厚生省としては、六、〇〇〇万円でなんとかこの事業をまとめたいとして努力中でありますが、現在までの検討では如何に設計及び経費を切り詰めても一、五〇〇万円ぐらい不足するということで、その応援を東部ニューギニア戦友会及び日本パプア、ニューギニア友好協会に求められたのであります。この厚生省の動きは過去における他の地域の例にならっているものでありまして、ビルマ以外はすべて当該地域の戦友会あるいは民間団体の応援によって事業を遂行したものであります。

そこで東部ニューギニア戦友会では六月七日、各部隊戦友会の世話人各位に御参集を願って協議した結果、完全に厚生省の要望に応じうるかどうかには疑問があるとしても、兎も角できる限り協力しようではないかということになりました。ここで少し付言しますと、昭和四十八年第二次の東部ニューギニア遺骨収集協力のための募金に含めて御協力いただきました慰霊碑建立協賛金一〇〇万円は、別項の後藤さんの収支報告にありますとおり現在も確実に残っているのでありますが、これだけでは厚生省の要望に応じ切れない次第でありますので、先述のような協議を行なったわけであります。

募金要領は厚生省の最終的な計画決定と関連させながら目下鋭意検討中であります。私としましては第二次の募金運動のとき、これをもって終りとしたいと考え、またそのように皆様に申し上げて御協力を願った過去の経緯を思い起し甚だ心苦しいものがありますが、既述の事情を御賢察のうえ何卒御海容をいただきたいと存じます。そして、われわれの心をこめた慰霊碑がウエワクの一等地に建立されるのだという風に大きいお気持をもって御理解いただき、この慰霊碑建立事業のための募金に最度の御協力を賜わりたく心からお願い申し上げる次第であります。

（終）



⇧慰霊碑を中心とした予想図

収支報告　東部ニューギニア戦友会

昭和55年5月31日

収入金額	科目摘要	支払金額
2,015,747円	繰越金＝54年度より繰越	
55,500円	会　費＝世話人会々費	
599,360円	祭典料＝合同慰霊祭当日収入	
68,000円	寄付金＝慰霊祭当日祭祠料収入	
67,590円	〃　＝軍司令官追悼式残金	
120,530円	〃　＝資料集売上（田中兼五郎氏より）	
90,457円	雑収入＝預金金利収入	
3,017,184円	**計**	
	諸　経　費	
	世話人会々合費	57,500円
	事務費＝用品、用紙、コピー代	15,500円
	通信発送費＝切手、ハガキ、その他郵送料	114,660円
	印刷費＝資料等印刷	120,710円
	交通費＝慰霊祭当日搬送	9,690円
	祭祀料＝靖国社、千鳥渕へ	371,000円
	雑　費＝初穂料、その他	48,190円
	計	**737,250円**
	繰越残金	**2,279,934円**
3,017,184円	**合　計**	**3,017,184円**

戦友

元軍通信連隊　岡崎弘之

カラワップの夜の森は昏かった。

その暗黒の静寂の中に戦友、多田松蔵が凝然と佇んでいた。近づいたのが私だと判れば笑顔が浮ぶはずだった。それがなかった。

「おい多田、おれだ、背山だよ」と呼びかけたが、彼は無表情のまま、闇の中に溶けこむように消えていった。「どこに行くんだ、松蔵ッ」と叫んで目が覚めた。

多田松蔵は、アイタベ作戦からカラワップに引き返して来、マラリアと大腸炎のため、中隊の山南地区への転進に追随できないで病いに臥せっていた。衰弱しきっていた。中隊命令で確保していたかますの米をくすねて粥に炊き、その枕元に座り、さじで口に運んでやった。「どうだ、うまいか」と聞くと「うん、うまい」と答えたが口にしたのは少量でもういらぬというふうに口をつぐみ、かぶりを振るしぐさをした。おそらくもう空腹感もカユの味も覚えなかったのではなかろうか。

その翌朝、彼は眠りの延長のように静かにことときれた。昭和十九年十一月九日歿。享年二十五才。兵庫県城崎郡五ノ荘村の出身であった。その彼が三十六年ぶり、私の夢枕に姿を現わしたのにひと言も語ってはくれなかった。私は地元の地方紙に「追憶のニューギニア」という随想を連載してその掲載が終ったばかりであった。記事の終りに「ニューギニアの巡拝慰霊行はなんとしても果たしたい」然し、それが実現できても語りかけるのは一方的にこちらだけ――と重々承知で「かの地で亡き戦友たちと語りあいたい」と書いた。

多田の心霊は、それを生き残りの不遜だ！と怒ったのであろうか。いや、そんなことで怒るような彼ではない。純朴でいいやつだった。

同年兵、同内務班の初年兵時代の彼が、満州新京南嶺の屯営の中で私に噛きかけた言葉が心に残っている。「背山よ、お前、賢こそうな顔をしちょるくせにモタモタしてよくビンタをとられるのう」そういう彼も二年兵からビンタをとられる数は右翼に属していた。お互いさま、お互いに要領が悪かったのだ。夢の中で彼が口をきいてくれなかったことに覚めてから悲しい思いをした。仕方がない。架空の会話の中でしゃべらせてやるしかない。

「多田よ、すまんのう。お前をカラワップに埋めっぱなしでおれは内地に生還し、お前の齢の倍以上も長生きしてしもうた。お前は満州野の行軍ではちょいちょいアゴを出しよったが、頑健で元気な有線建築兵だった。あの戦争がなかったら、おそらくおれ以上に長生きしているに違いないのにな」

「まあな、ニューギニアでは、生と死は紙一重、何糎何粍の差で弾丸を受け、弾道がそれる。また、行動の分れ目が生死の分岐点とも言えた。お前がカラワップに残り、おれはアイタベの前線に出た。それも生死の分岐点と言えよう。事実、前線で死んだ戦友もあった。おれはアイタベ作戦では死ななかったが、その疲れが病いを誘った。カラワップに残ったお前だって、マラリアで血尿を出し唸っていたではないか。生き残ったことをあまり気にするなよ。お前もあれからまた苦労したんだろ、何分、食うもんが無かったからな」

「うん、多田が死んでから二ケ月目に山に入った。たこつぼを山の陵線に幾つも堀って、おれはどの穴の中で死ぬるんだろうと思った。敵さんの包囲攻勢で、軍司令官からは玉砕命令が出ていたんだ。〝健兵ハ一敵ト戦イ、重患ハソノ場デ戦イ、動キ得ザル者ハ刺シチガエ、各員絶対ニ虜囚タルナカレ〟と。

ところがある日、ノースアメリカンが超低空で飛んで来た。おれはそのとき、ニミンガイという部落の屋内で昼めし（正確にはサクサクで作ったうどん）を食べていた。迫った爆音を耳にするとともに屋外に飛び出し地に伏した。ところが敵は射ちもせぬ、爆弾も落さん。やれやれ助かったと起き上って見上げる空からヒラリヒラリと多数のビラが舞い降りて来る。ビラにはこう書いてあった。〝日本軍降伏す。戦闘を停止せよ〟裏面には〝幸福来たる。幸福来たる〟と――」

「よかった。よかった。まあ折角ニューギニアで拾った命だから体を粗末にするな。好きな酒もほどほどにして、おれの分も長生きをして呉れ」

「ありがとう、多田よ」

ところで、先日のある新聞の投稿コラムにこんなコントが載っていた。

「ぼくンちのおじいちゃんは戦争に行って戦死したんだよ」

「年寄りのおじいちゃんに戦争なんかできないよ」

「いや、若いときにしたんだよ」

「若いときならおじいちゃんじゃないよ」

「うーん、だから、戦死してから年をとったんだよ」

戦争を知らない世代の人たちは微苦笑のうちに読み過したかも知れないが、かの地で戦友を失なった生還者や、肉親に戦死者を持つ遺族の方々にとっては、ジーンと涙線を刺激するに違いないコントだった。

遺族の方の心に生きる戦死者は、内地で別れたときの――生還者の瞼に浮かぶ戦友はかの地で共に行動した当時の――面影と年齢のまま、永遠に生き続けているのだと思う。三十六年ぶり、夢で再会した戦友多田松蔵と言葉を交せなかったのは残念であるけれど、六十一才の私の耳朶には、二十五才の彼の声音まではっきりと残っているのだ。

所感

元野戦高射砲第六十四大隊
岳川　石田久喜

昨年九月、故安達閣下の三十三回忌、一昨年九月、元高射砲第四連隊所在、甘木市の丸山公園に、野戦高射砲第六十四大隊慰霊碑の碑文、及び建立の所感を拙詩乍ら誌上を借りて御知らせ致します。

安達第十八軍司令官卅三回忌辰恭賦奉奠

三十三回値忌辰　白雲飛処仰蒼旻
銃攘月影軍営暮　旆靡微風帷幕晨
萬古丹心楠子義　千秋清節石樵仁
銀鞍銕剣猶如昨　魂魄長欽護国神

弔英霊

仰見顕彰忠義碑　當年戦士憶英姿
慤懃今誦招魂賦　萬里雲飛南海陲

建碑有感

築紫青山塵外巓　豊碑新樹白秋天
撰文刻字今成就　忠烈遺芳萬古伝

図書紹介

歴史読本臨時増刊（八月十日発売）

今夏、終戦三十五年特集「手記わたしの八月十五日」を企画いたしましたところ、たくさんの方々から手記をお寄せいただきました。

さらに特別企画として、全国の戦友会の御協力をいただき「戦友会一覧」を掲載いたしました。戦場で辛苦を共にした戦友の皆様が一人でも多く懇談なさる一助ともなれば誠に幸甚と存じます。

御注文は、もよりの書店へ

〒100 東京都千代田区丸の内三―三―一
新東京ビル
新人物往来社　歴史読本臨時増刊部

死闘の中で
——終戦三十五周年に思う——

参議院議員　堀江正夫
(元第五十一師団・第十八軍参謀)

本年は、終戦三十五周年にあたる。顧みて洵に感慨無量である。戦争間や終戦後のムッシュ島での生活、四十八年の遺骨収集、その他戦後の戦友の皆さんとの交遊、参議院選立候補に当っての、戦友の皆さんから頂いた御厚情等、眼を閉じると色々のことが交錯しながら、昨日のことのように鮮明に浮かび上がってくる。

それに今年は、いよいよ念願の立派な慰霊碑が出来ることになった。永かった、そして短かくもあった今日までの生活を、ひしひしと振り返ってみることの多い昨今である。

偶々、ある機関紙に載せる、終戦の思い出を書きあげたところに、後藤さんから戦友会報への寄稿の命令を頂いた。大変失礼であるが、それをその侭御送りすることにした。御許し頂ければ幸である。

★玉砕の秋迫る

軍の最後の秋は既に目前に迫っていた。軍主力の玉砕時期を九月末とし、れい下部隊に「玉砕に臨む最後迄、不屈不撓の敢斗精神及び最後における操守を堅持し、皇軍の本領発揮に遺憾ながらしむべし」と、軍命令をもって示されたのが、七月二十五日である。

ブナ・ギルワ以来連続不断三年間に亘る東部ニューギニアにおける死斗も、遂に刀折れ矢尽き、いよいよ最後の段階を迎えようとしていたのである。

当時私はセピック兵団参謀を命ぜられ、主力決戦場の南方約百粁、広範なセピック河流域に収容した、病兵数千名を早急に戦力化すべく、日夜カヌー等で流域各部隊を駆けずり廻っていた。軍主力の玉砕についで、兵団を挙げて独立玉砕を全うするためである。

折りしも八月八日、西方防衛の第一線である第二十、第四十一両師団の間隙を突いて、軍司令部との中間の要点ヤンゴールに、敵一個大隊が侵入したとの通報に接した。軍主力玉砕の時機はいよいよ切迫した。予定の九月は一ケ月は早くなろう。軍司令官の下に駆けつけたい。そして共に死にたい。これがその時の私の卒直な感懐であった。

★軍司令部召喚——終戦

わが兵団地域に対して連日行われていた敵の銃爆撃が、投降勧告のビラに変ったのがその直後である。十五日になると、敵機は完全にわが上空からその姿を消した。そして、十六日吉原兵団長と私に対して、軍司令部帰還の命令が届いた。

軍司令部か師団司令部が襲撃を受け、被害を生じたのではないかというのが、私の第一感であった。ともすれば頭の中に、敗戦の二字がちらついてくるのを圧えつけて、重苦しい空気の中を言葉も交さず、共に草原の道を急いだ。そして三日目の夕方軍通信隊に到着して、初めて敗戦の事実と終戦の詔勅とを知った。

あの瞬間の、目の前が真暗になり、総てがガタガタと崩れ去ってゆく思いは、今もなお私の心を強く緊めつけ続けている。

敗戦の大みことのり　畏みて
涙にむせび　誦じまつれり
誦ずれば　断腸の思い極まりて
胸裂けんとす　頭狂わんとす

戦場でよみ続けてきた私の和歌も、この二首を最後として再び作ることなく、既に三十五年を経た。

★全員を無事帰国させねばならぬ

もう一つの愧ずかしい思い出がある。

無念の涙にむせびながら現地の降伏式に列したあとの協定で、濠軍から全軍のムッシュ島集結が命ぜられた。

私は単身第五十一師団に対する集結命令を伝達し、即日濠軍地域に引返してきた。ムッシュ島に先行し、全軍の収容を準備するためである。

濠軍参謀長は当然直ちに私の報告を聞くものと思い込んでいた。ところが、歩哨線からジープに乗った私を案内して行ったのは、高く金網を巡らせた施設の中である。一歩入って気がつくと捕虜収容所ではないか。

私は恥辱に身を震わせた。金網沿いの柵内で、仁王立ちの侭その不当を主張した。隣の柵内のわが捕虜の一団も一生懸命に「あの参謀は我々とは違う」と、訴え続けてくれた。次々と将校が来て、なだめるように、天幕の中で休み、夕食を摂ることをすすめた。私は一顧もせずに立ち続けた。恐らくその時の私の顔は憤怒に燃えていたに違いない。

夜遅くなって、真暗な道を三名の歩哨が私を連行した。入ったハットメントの中には、現地協定の際顔見知りの幕僚が五名、机を前に坐っている。

「何故休まないのか」「何故食事をしないのか」「何を怒っているのか」等々次々に質問した末に、「貴官は捕虜であることを自覚しているのか」と畳み掛けてきた。「いや、私は国際法上のいわゆる捕虜ではない。貴軍の指示によって行動した小官を、あの施設に入れるのは無礼である」と、昂然と言い切った瞬間、頭にひらめいたのは、現地協定のため濠軍司令部出頭に当り、安達軍司令官が直接私に言われた言葉である。

「堀江参謀、悔しくても苦しくても我慢をするんだよ。生き残った将兵を一人残らず内地に無事帰還させるのが、最後のご奉公だよ」と、諭すように言われたあの一言である。

仕舞ったという自責の思いと共に「判った。幕舎にも入る。食事もする」と静かに頭を下げた。そして、狐につままれたような顔の連中を後に収容所に帰った私は、高熱で人事不省中急襲を受け捕虜となった一人の将校と、夜を徹して語り明した。彼の名もその後の動静も知らない。今どうしていることであろう。

東部ニューギニア慰霊碑建立

東部ニューギニア戦跡慰霊巡拝団の御案内

国際航空サービスでは、政府・戦友会が建立する慰霊碑の除幕式に際して、関係地域の各部隊生存者と御遺族の皆様を案内する「**東部ニューギニア慰霊巡拝団**」を派遣計画いたしますのでぜひご参加下さい。
くわしくは追ってご案内申し上げます。

国際航空旅行サービス株式会社

〒100 東京都千代田区有楽町1—6—6(小倉ビル)
TEL 03(502)1095～6
取扱主任　青木猛夫

軍司令官の深い愛情の下、日本の土を踏むことのできた戦友は一万名、帰国後相ついて不帰の客となった数は約四千名に達するが、今なお固い友情に結ばれて、生き残った者の深い自覚の下に、それぞれの道を逞しく生き続けている。

★戦後の私――今を思う

第一の私の人生は、昭和二十一年春の帰国と共に終った。

最後の引き揚げ帰還船の中で、歴史の先生になろう。立派な次代の若者の教育に、この身を捧げようと、密かに懐いた夢も、帰国後の生活の中に淡雪のように消え果てた。二十七年警察予備隊に入り、爾来二十年余を自衛官として、充実した第二の人生を送った。

そして今私は第三の人生を、奇しくも政治の場で過している。

政治の場における私の主な行動分野は、国の防衛の問題であり、英霊顕彰や旧軍人等に対する国家施策の問題である。

過去五十年間、それぞれ取り組む場は異ってはきたが、一貫して、同じ問題と取り組み続けていることの、わが運命の不思議さをひしひしと痛感させられてならない。同時にまた、そのことの幸せとわが人生の意義とを、常に敬虔な思いで噛み締めて悔いなきを期している毎日である。

そして顧みれば戦後三十五年、私を支えてくれてきたもの、私の思想と行動を律しさせてきたものの多くが、あの戦場での数々の体験と教訓に基くものであることに、今更のように深い思いにかられる。

一九八〇年代の厳しい国際情勢を立派に切り抜け、わが祖国わが民族を真に揺ぎのないものにするために、極めて微々たるわが力には過ぎないが、全身全霊を捧げ尽さねばならぬ。あの終戦前後の、極限下の環境と純粋に昇華された心情とを忘れることなく、わが身を焼き尽さねばならぬ。安達閣下、そしてわが戦友の英霊よ、親しく照賢ましまし、われわれを励ましたまえ。

これが私の戦後懐き続けてきた心境であり、今日の決意であり、祈りである。

慰霊碑の建立に英霊を憶う

元第二十二飛行場大隊　**諸田照吉**

船は六ノット位の速度で走っている。海は静かだ、白波が船首に砕けて泡沫の様に消えて行く久し振りに心地良いエンジンの旋律を聞いた。

時間の経つに連れてニューギニアの大地は次第に遠のいていった。船首に立った私は再び見ることはないであろうニューギニアの大地を何時迄も何時迄も眺めていた。その姿が水平線の彼方に没して全く見えなくなる迄、そして「戦争は人類の悲劇だ如何なる理由があろうとも戦争は決してやってはいけない」と堅く心に言い聞かせた。

それは昭和十八年九月十三日敵の上陸によりニューギニアのラエを撤退し高峰三、四〇〇米のサラワケットを越えてウエワクの基地にたどり着たが疲労とマラリアの為倒れ十二月十二日ウエワク第百十七兵站病院（松の岬）に入院同月二十八日内地還送の為病院船第五十一班に収容された時の悲痛なる叫びであった。何処の戦場もそうであったろうがニューギニアの戦場は悲惨であり正に此の世の地獄であった。ウエワク松の岬での病院生活は生涯忘れることが出来ない。

伊藤上等兵から貰らった砂糖で砂糖湯を作って飲んで見たがさっぱり良くならない血尿は止らず苦痛の毎日が続いた。日課のような爆撃が終って病棟に夕闇が迫ると今日もまた生き延びられたかと安堵の胸をなでおろした。やせ衰えあばら骨が一本〈〉数えられる様になった時頬をなで回したり爪の色艶などを眺めたりして自分の寿命をはっきりと自覚し出した。もう何日も生きられない、そう思った時口惜し涙がとめどなく流れた。

戦斗に於ける戦死ならば本望であるが敗戦による撤退、撤退による病死、それは余りにも惨めであった。その時である私はどうせ死ぬならごつごつしたビンロー樹の床でなく椰子の葉の敷てある床の上で戦友に看護られながら死にたいとそんなぜいたくな希望を抱いた。あれから二年後昭和二十年八月十五日、日本は連合軍に無条件降服をした。これは有史以来日本が初めて遭遇した敗戦の悲劇であった。

衣食住を失なった国民は恰かも大地にひしがれた雑草の様にみじめで虚脱状態に陥入ったのである。無差別爆撃により都市と云う都市は焦土と化し焼ただれた大地のみが大空の下にさらけ出されていた。

あれから三十五年物変り星移り焦土と瓦礫の中から起ち上った国民の努力はよく風雪に耐え燦然として世界の経済大国に躍進したのである。それは質素にして勤勉な国民全体の努力の結晶であることは否めない事実であるが此の繁栄の陰には祖国の安泰を夢見て散華した尊き戦友の犠牲があったことを吾々は片時たりとも忘れてはならないのである。

ニューギニアから九死に一生を得て生還した私は生きていることの素晴らしさを今更乍ら沁々と痛感している。

東京の夜は静かに明けてすが〈〉しい朝を迎える。そして街は活気に溢れて一日が終り夕暮れを迎える。街にはネオンが輝きロマンに満ちた夜の営みは昼にも増していん賑を極める。やがて夜は更けてまた明日を迎える。この繰り返しが人生でありこの現実の中に存在していることが生きている証拠である。生きていると云う事の何と素晴しいことか、終戦以来三十五年祖国の安泰を夢みて雄々しくも南瞑の地に散華した戦友の御霊は歳月の流れと共に忘却の彼方に押しやられ繁栄の陰に埋没されんとしている。

再度に亘る遺骨の収集は実施されたがその完璧を期することは不可能であった。共に語り共に戦った戦友の遺骨は今尚ニューギニアのジャングルに放置されそして風化しているのである。

哀悼痛惜の情洵に窮りなく思いを御遺族の上に致せば痛恨更に尽きざるものがある。何と悲しいことであろうか、胸に手を当て往時を追憶また懐古すれば戦友の面影が彷彿として眼に浮び波涛万里故国を慕う戦友の慟哭が聞こえて来る様な気がする。

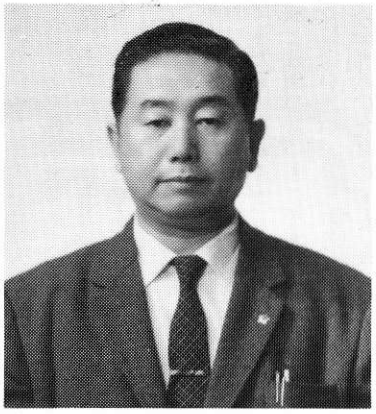
「慰霊碑の建立」これこそは生きていることの素晴しさを思う存分満喫している吾々生存者の当然やらねばならない責務である。

想えば往事茫々として幻の如く現世の定めとは言え今日の繁栄を亡き戦友と語ることの出来ない無情の風がたまらなく悲しまれるのである。

乞い願わくば祖国に帰還出来ない英霊が「慰霊碑」のもと安らけく永遠の眠りにつかれんことを祈念して止まない。

ニューギニアに憑かれた男たち

元十八軍軍医部　鈴木正己



鈴木正巳氏

十年前にニューギニアに憑かれた男たちが中心になって、日本パプアニューギニア友好協会という社団法人が誕生した。

それ以来、会長、副会長、専務理事、常務理事を始めとして、理事及び会員一同一丸となって、全員多大の犠牲を払い乍ら、両国の友好親善の為に数々の業務を果し、ニューギニア政府はもとより、関係各方面より多大の信頼を得ている事は既に衆知の事である。

今次大戦に於て、古来戦史に稀なる苛烈極まる東部ニューギニア作戦に参加した日本軍将兵約十五万中、生き残って内地に帰還した者は僅かに一万人余であったが、此の協会の主体となって活動したのは、之等戦友であった。

之等の人々のニューギニアに関する情熱は正に「ニューギニアに憑かれた男たち」と呼ぶに応わしい。

パプアニューギニアも独立以来四年目を迎えたが、今回昭和五十五年四月三十日に行われる「協会創立十周年記念総会」は、ポートモレスビーで開催することになり、之が為の参加人員を募集した処、総勢百五十一名となり、予定人員を超過した為に参加できない者迄出るような有様であった。

一行は、四月二十五日鹿児島空港発ニューギニア航空PX12便により、夕刻六時ポートモレスビー到着、翌日より数ケ班に分れ、それぞれラバウル、マダン、ウエワク、カイリル島、ヤカムル、マプリック、セピック地方アンゴラム、ゴロカ等各方面に行動し、四月三十日には再びポートモレスビーに集合し、総会及びパーティに参加し、五月二日には、全員揃って元気に鹿児島空港に帰還した。

終戦以来三十五年ぶりで訪ねたニューギニアであった。

紺碧の海、白い珊瑚礁、美しい海岸線を縁どる椰子林のたゞずまい……その風物は昔の侭のものがあって、懐しさに胸の締めつけられる思いであった。そして此処には、私達と共に苛烈無残な戦斗に参加して散華した十五万に垂んとする戦友の霊魂が眠っているのだ。

マダン、ウエワク、マプリック等で私達は心ばかりの品々を供え、祭文を奉り、心からなる慰霊祭を行った。

マプリックへ行く途中、サレーの部落では第二三九連隊森永大隊長の戦死された地点で同行された森永夫人と共に、心からなる黙祷を捧げた。

ウエワク奥の山中のジャングルには、往年の高射砲陣地が其侭の姿で残っており、錆びついた高射砲の放列に胸をえぐられる思いであった。

洋展台の忠魂碑には、今でも遺骨が露出しており、余りにも無残の感があった。同行の渡辺君からその点に就いて申し入れがあったが、私も同感であったので、後で協会の梶塚専務に善処するように依頼した。

ポートモレスビー到着の翌日、即ち四月二十六日に市内見学が行われたが、其の時日本大使館前の路上で撮影した写真の三枚に心霊現象が現れた。専門家に見て貰った処、我々が訪れたのを喜んで集って来た複数の戦友の霊の写真であるという。

今、ニューギニアで日の丸の国旗が掲げられ、菊の御紋章のある建物は此処だけである。此処を拠り処として、戦友の霊が集って来たとしても不思議はない。

私は今回のニューギニア行で約三〇〇枚の写真を撮った。その中で、此の時、此の場所で撮った三枚にだけ、心霊写真が現れたのは何とも不思議であるという外、ない。

四月三十日、ポートモレスビーのアイランダーホテルで行われた総会は、山口大使も臨席され、極めて順調に進行終了した。

その夜ホテルの庭園で行われたパーティーは、三〇〇人近い来賓を迎え、極めて盛大で又楽しいものであった。

日本から運んで行った菰かぶりを、PNG総督トーンロコロコ郷が、協会の法被を着て鏡割りをしたのは印象的であった。

オーストラリヤのキャンベラ国立大学歴史学教授のハンクネルソン氏等一行五名が、ニューギニア戦争の研究班をつくり、テレビキャメラを携行して我々の一行に同行していたが、此の総会後のパーティで、私にインタービューを申込んだ。梶塚専務の指名で私は彼等と会見した。テレビキャメラの前で約四十分間に亘り、インタービューが行われ、之はオーストラリアのテレビに放映された筈である。

その模様は要約すると次の如くである。

質問――今次ニューギニア戦争中に於ける日本軍将兵とニューギニア土民との交流について。

答――**私達は三十五年前に、**平和に暮していた彼等の間に惨烈な戦争を持ち込んで彼等に生命財産の危険を与え、剰之我々の食糧等に迄も彼等の援助を受け、多大の迷惑をかけて済まなかったと思っている。それにも関らず、今回私達の訪問に際しては、到る処で心からなる歓迎を受けた。之はあの戦争中にも、私達と彼等との間の精神的交流が暖く行われていたからだと思う。

質問――あなたは、あの戦争中濠軍が土民兵を訓練して、日本軍の攻撃に用いていたのを知っているか？

答――知っている。一例を云えば、私の親友第二〇師団第一野戦病院長平賀軍医少佐以下の部隊が、終戦の直前にマプリック方面リンブクンの部落で土民兵の為に皆殺しになった事を知っている。

質問――その時、あなたはどう思ったか？

答――勿論口惜しかった。しかし彼等には彼等の生活があるだろう。日本軍の敗色が決定的になったあの時点で、日本軍に協力した事で、彼等が戦後濠州軍の為にどのような処分を受けるかを考えた時に彼等があのような行動に出なければならなかった事も、或程度了解できる。

質問――あなたは了解しても、他の将兵は如何？

答――大部分の人は了解できると思う。

質問――あなたはあの苛烈な戦争体験を早く忘れ去るべきだと思うか？

答――いや、将来二度と過ちを繰返さない為にも、しっかり心に刻みつけて置くべきだと思う。忘れて了っては、体験しな

いと同じではないか！

質問――もし今度の戦争で日本が勝っていたとしたら、現在のニューギニアはどうなっていたと思うか？

答――大変難しい質問である。しかし、少くとも日本人とニューギニア土民との人間関係に就ては、現在より悪くなっているとは考えられない。

インタービューの後で、ハンクネルソン教授始め五人の人々は「グッドトーキングを有難う」と云って、私と握手をして別れた。

通訳はニューギニア航空極東地区総支配人である協会の岩渕常務を煩した。

ニューギニア汗駄句片片　鈴木無茶

全日航のスト騒ぎで四月二十三日二十四日の二日間図らずも鹿児島の宿で、妻とゆっくり旅情を満喫する機会に恵まれた。きびなごと云う鰯に良く似た小魚が美しくも又珍味であった。

きびなごや皿に春の日返しをり

夕膳にきびなご盛られ春行かす

四月のニューギニアは秋である。ポートモレスビー附近の野原では、到る処芒の穂がなびいていた。

ニューギニア四月の野辺の枯尾花

南国の花は色鮮かなものが多い。とりわけハイビスカスとブーゲンビリヤは、そのかみ、此処の山野に流された戦友達の夥しい血汐の様に真紅であった。

鉄錆と草蒸す屍仏桑華

仏桑華読経の声のテープより

マダンでは対岸の小さな島へボートで渡った。その時、昭和十八年十二月二十五日南洋群島方面で海軍飛行艇の操縦員として、機上戦死した弟亨の為に、従姉を写してくれた沢山の写経も、妻と共に海に流して弟の霊を慰めた。

仏桑華添へて写経を流しけり

島に渡って久方ぶりに椰子の実を取らせて妻と共にその水を呑んだ。此の水は、もろもろの感慨と共に五臓六腑に滲み亘る思いであった。

汗拭いて妻と椰子水呑み交す

昭和十八年四月、私がアムロン猛頭山の軍司令部にいた頃、私の背丈位のレモンの木があって、何時も清々しい香りを放って私を楽しませてくれた。度重なる激しい敵機の爆撃に遭い乍ら、此のレモンの木は、亭亭たる大樹に育ち、夏密柑程の大きな実をつけて、私達を迎えてくれた。たゞ、あの頃のような香りは、もう全く失せていた。

片蔭やレモンの大樹をいとほしむ

プーメリヤの白い花が、日本の桜の樹位の大きな樹に美しく咲いて、馥郁たる芳香を放っていた。モレスビーでも、マダンでも、ホテルの食卓には、此の白い花が飾られて、私達の眼と鼻を楽しませてくれた。よく見ると之は日本の山梔子と違わないように思われる。

黒き手で山梔子活けるカナカ族

マダンのホテルで、雲の切れ間に斜めに掛っている南十字星を見た。妻や遺族の奥さん方に教えて上げると、皆それぞれの感慨で空を見上げているようであった。

涼風や南十字星妻と見し

何処へ行っても三十五年前に憶えたピジン語がばっちり適用するのは嬉しかった。マプリックの途中、山の中の青空市場で買ったモンキーバナナは美味であった。

ピジン語でモンキーバナナ購へり

亡き戦友に白い米を

――ニューギニアに観音像を建てる――

元自動車三十九大隊中隊長　**大久保　豊**

「二百人余りの部下を連れて行き、生きて帰ったのは十八人だけ。実に悲惨な戦争でした」。三十数年前の悪夢は、今も消えない。「ジャングルの中で死んだ戦友たちのために、われわれ生き残った者がしてやれるのは、せめて霊を慰めることだけ」。そんな永年の念願が実り、八月、ニューギニアの激戦の跡に仲間と観音像を建てる。

昭和十八年四月、第十八軍（猛軍）の自動車部隊中隊長（陸軍大尉）として、ニューギニアに上陸。「五個中隊のうち、無血で上陸できたのはわが中隊だけ」。来る日も来る日も、米軍の爆撃と艦砲射撃が続いたが、補給路を絶たれた日本軍にとっては、さらに恐ろしい〝敵〟が待ちかまえていた。

飢えとマラリア。十四万人が上陸したうち約十三万人が死亡したが、死者の八割がそのためだった。「戦友たちは、死ぬとき、ひと目でいいから白い米が見たいというんです。食べたいというんじゃない。ただ見ればいいと…」。当時に思いをはせて目をうるませる。三十五年、ニューギニア帰還兵や遺族らと「県ニューギニア会」を結成。五十二年から毎年、現地へ慰霊巡拝団を出し、観音像を建てる今年は四回目の派遣。自ら団長を務める。

「死んだ戦友の奥さんたちが、現地で白いご飯をたき、慰霊祭でお供えするんです。〝お父さん、遅くなってごめんなさい。こんなにおばあちゃんになっちゃって〟なんてね。胸がつまります」。現地へ行く人たちはすでに六、七十歳だが、夫へのつのる思いが、巡拝で病気になった人はこれまで一人もいないという。

会員らから寄せられた浄財八十万円でつくった観音像は二十七日、松本市の県護国神社で行う慰霊祭で入魂。かつての日本軍が玉砕の地と定めたウエワクの山頂に、祖国に向けて建てられる。像のやさしい表情は、亡き戦友たちを慰めることだろう。もっとも、「あまり美しすぎて、美術品と間違えられれば高い関税をとられるので…」と、現在、観光業者を通じて折衝中。

九死に一生を得たせいか「もう何が起きても、なあに、死ぬわけじゃなし」と動じない。松本市の県合同庁舎の用地選定問題では、現地再建派のリーダーだ。「考えてみれば、私たちの世代は戦争で青春も友も失った。それに比べれば、今の若い人たちは幸福ですな」。ふと寂しそうな笑いも見せた。

（昭和五十五年七月二十七日掲載　信濃毎日新聞記事より）

発刊ご案内

ニューギニア・ピジン語会話集

神戸外語大学研究所　ニューギニア・ピジン語研究所　宮　一郎著

当会々員宮一郎氏は、かねてからニューギニアと、わが国との友好親善のためには、彼の慣用語を知ることが大切であると考え、三十数年に亘りピジン語の研究に打ち込んで来られまして、このたびニューギニア・ピジン語会話集を出版されました。

本書を拝見すると、これまでピジン語に馴じみのなかった人でも僅かの間で会話をマスター出来るように編集されており、われわれが待望した会話集で広くご利用頂きたい。

頒布価格　九〇〇円（送料含む）

社団法人　日本・パプアニューギニア友好協会

飛行第68戦隊の末路

元飛行68戦隊　高橋昌敏

防衛庁戦史室著「東部ニューギニア航空作戦」の一節に、ウエワク方面航空戦斗の終末として次のように記録されている。4月27日第四航空軍は、第18軍の要求に基き、これら航空の地上勤務部隊をその指揮下に入らせた。もはや実質的には何等の指導もできないものであり、本然の航空業務がほとんどなくなっているためでもあった。……地上部隊下級者の航空地上勤務部隊に対する感情はきびしかった。地上の戦備を犠牲にして飛行場作りなどに尽力したにもかかわらず、いざとなるとほとんどみるべき協力もせずに退ってしまう、航空は贅沢であるというような観念が一般に強かった。……8月19日、大本営は東部ニューギニア方面にあった航空地上勤務部隊の大部分を第18軍の隷下に入れるよう発令した。と……。

4月27日、18軍の要求に基き第四航空軍の各部隊は18軍の指揮下に入ったこと。8月19日大本営よりの発令と4ケ月の時間差のあること、等について私見を述べ、次に戦隊の末路をまとめてみた。四航空軍司令部はマニラえ早々に退却した。隷下部隊をニューブリデン島から東西ニューギニアを放棄し、救出の見込み全く無く、米軍の上陸により早晩軍司令部と隷下部隊の連絡も意の如くにならないことは明瞭であった。自らの隷下部隊を18軍の要求により、収容してもらったとは全くお恥しい話である。又大本営発令が約4ケ月後というのも、米軍の進攻速度から申せば、ソロモンより西ニューギニアえの上陸の時間で大本営の対応が如何に連合軍に対し後手であるかが伺える事例である。さて、18軍将兵が飛行場作りに尽力したこと、いざとなると協力もせず退った四航軍司令部、これも事実である。残置された我々飛行戦隊に対する風当りはよくなかったことも事実である。然し、飛行場設定についての空地協力は、大本営が大綱を決定したものであり、現地でにわかに協議されたものではないと考えるし、いざとなると非協力で早々に退却したのは航空軍司令部のみで、戦場に放棄された各飛行部隊、飛行場大・中隊、設定隊、情報隊、航空敵、気象隊、等に何等の責任はなく、これらは今尚甚だ遺憾に考えている事実である。飛行機のある間は、優勢な米空軍の中に最後の一機迄投入し、状況が悪くなるや軍司令部は自らの安全のみを求め、国軍の伝統と威信をも捨て、隷下部隊を放棄し、大本営もこれを咎めることがなかった。不可解である。ウエワク地区の飛行戦隊は、米軍アイタペ、ホルランジアに上陸するや航空道路隊という名のもとに、アイタペ作戦の担送を主たる任務として遂行した。(戦史では、第二輸送隊となっている)68戦隊は5月5日の夜、第33飛行場中隊から最後の糧食3日分を受領して、米を輸送するトラックに便乗しボイキインに向った。夜明前魚雷艇の射撃を受け、翌日から徒歩行軍で旗山地区に進出し浅田大佐(航空地区司令)の指揮下に入る。(飛行戦隊は、食糧、燃料等すべて協力飛行場中・大隊から受け、若干の機材と部品のみを保有し、機動力を特徴としていた)

昼は密林に入り、食となる草根、実を探し、夜はアイタペえの担送である。食糧の配給、薬品は全く無く、急速に体力の消耗を見て、担送能力は減ずる一方であった。然し、アイタペ方面に轟く砲爆撃音を聞き担送する米の一粒をも盗むことなく終始出来たのは、多くの犠牲を出したが末だに戦隊の軍律が確立していたことを嬉しく考えている。8月下旬その任をとかれ、懐しいウエワクに退却を命ぜられた。浅田大佐は訣別に当り「航空部隊は真面目によく任務を達成してくれた」とニューギニアではもうない米を一人二合配られたときは、老大佐の前で落涙を禁じ得なかった。退却に当り、浅田大佐の訓示の中に、部下をおとしてゆくな友軍に喰われることあるべしと。驚きではあったが、人肉相喰う戦争の様子は、前線より退ってくる兵より聞いていたので、もし人肉を喰わねばならないようになれば、自ら死をえらぶべきだと自分に言い聞かせて東え進む。全員杖なくして歩くことは出来ない程に栄養失調は進んでいた。生きながら蛆に食われている兵、腐乱死体の異様な臭ひ、生きて横たわる兵にたかる夥しい銀蠅。もう半分は白骨になっている者、泣いている者、人の呼ぶ銀蠅街道は、筆舌に尽し難い地獄絵図の連続であった。昼間密林に入っても、数の多い地上部隊が、人喰いに見えてこれをさけてゆくなど、少数の戦隊兵員は、たよるものもなく、夜になるとウエワクを目指して進んだ。途中部下を失っても埋める体力もなく、皆で密林の奥に引きづり木の葉や草をかけるのが漸くであった。

此の頃米軍はP51を戦場に投入した。その型は三式戦とよく似ており、更にエンジンのタービン音が同じなので懐しくその機影を追ったものだ。英軍はモスキートを使用し海岸線の銃撃を行い、ブレンヒムは水平爆撃を繰り返した。友軍に一機の飛行機もなく、艦艇もなく、食もなく、われわれはただ追われてゆくだけであった。漸くウエワクに帰ったが、東飛行場は蜂の巣状に堀り返されて無残な姿を横たえていた。

「航空部隊が負けたからこんなことになったんだ、お前らに食わす草はない」と地上部隊に追われるが如く、アレキサンダー山系を越えてウリモ草原え進む。草ばかりの食で緑色便以外は出ず、杖をたよりの山越えは楽ではなかった。然し現地人が敗残のわれわれを心よく迎えてくれたし、よく世話をしてくれたのは神の加護とも思えた。9月22日セピック北方ウリモ草原のウエルマンに落ち着く。酋長ニヤールメリー・マンブジャ等一同が亡霊のような杖つきの一隊をこれから一年二ケ月親身以上の世話をしてくれた。何名かの者が生き残れたのも、此の人達のお蔭と言うべきである。アメーバー赤痢、マラリヤ、極端な栄養失調で、二十年を迎えることなく三分の二が草原の一角に斃れていった。餓死というべきである。78戦隊は、アイタペからウエワクに退却するや、ただちに飛行場周辺の警備部隊に編入され、濠軍ウエワクに上陸するや、きりこみ隊として夜間攻撃の繰り返しで将校全員戦死、生存者三十三名と不運な末路であった。

顧みれば、近代戦は空を制する者は海をも制し、陸をも制したので、この原則をも弁えず、工業大国と開戦したことが悲劇の始まりである。陸海空がどうであったか等は末節と言うべきであろう。たゞ軍の統帥とか信義という点になると、第四航空軍司令部には及第

点は出せない。部下軍隊を放棄して当然としたからである。

美しく勇戦敢斗の戦史を書くのもよいが病根が何処にあったか、旧軍の欠陥をもよく研究して誤りを再度繰り返さない様にしなければ、ニューギニアで餓死していった多くの将兵に何と答えてよいのであろうか、臭いものに蓋では改善は出来ない。

もうすんだことであると良く聞くが、使えるだけ使い、弊履の如く捨てられるのが軍隊であると考えれば、誰が身を国家の防衛に投じようか。

飛行第68戦隊は、ウリモ草原の一角に餓死して消滅したと言う可きである。

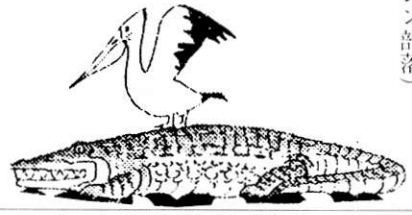
以上

南瞑萬里五十首詠

——パプアニューギニア慰霊巡拝の旅——

元高射砲五十大隊　犬塚剛士

鹿児島を翔ちたり桟首は南すかの特攻のますらをの如
この空や華と散りてし学友いくたり数珠握りしめ瞑るわれは
ニューギニアの上と思へども雨雲のむか伏す極み見ゆるものなし
ポートモレスビーの灯ぞ見え初めし吹き出づる三十有余年耐へ来しもの
敵空挺隊降下したりしナザブ平原飛行場となりて今着陸す
帰り来む必ずまたと誓ひしを早も四十年近く過ぎしか（ヤンデン君再会）
若き日の面ざしはありヤンデンが声つまらせて吾を犇と抱く
生命ありて訪へばうれしも打笑みてわが名呼び寄る部落びとあまた
片仮名のポブと名を書きバンザイと云ひつ慕ひ寄るパプア翁よ
ブテバンの村びと集ひ笑みこぼれ日本の童謡うたふたぬしさ（兎と亀）
この童らは瞳明るく大空の青澄む如しわれを愧ぢしむ
人類の原始を生きるこの部落はライターの火を驚き目守る（テガレン部落）
天地は生命の炎えて陣地跡を密林中に呑み尽したり
遠き日は夢幻か新らしきラエの街中に佇み惑ふ
敵機ばかり轟き飛べるラエの空いま鳥どちの群れて舞ひおり
弾丸は早や尽き果てければ為すがまゝ、敵機睨みて地団駄踏みつ
すは敵機かと睨めつづけゐしサラモアのこの空なれや雲流れつぐ
この生命なに惜しまむと戦ひき南瞑萬里われも友らも
亡き友の骨拾はむと密林に分け入れば蚊の群れさはぐさへ
花なれだ散らでやはある散るゆゑに花は美し散らばなほこそ
牽引車これのくろがね密林はただ赤錆びの土と朽ちしむ
密林の土を素手もて堀るわれかかの日の砲の鉄の骸を（ラエ陣地）
東ねもつ香の煙に咽びては友らが瞑る丘辺彷ふ
小嶋兵長仆れしあたり草むらの土あたたかしわれを泣かしむ
銀蠅のさばへなす唇喘ぎつ、妻子よびしか友は最後に
掌底の土となりしか戦友よわが身もやがて還る土ぞも



あな哀れ狂ひ彷よひ去にし友跡問へばとて知る者ぞなき
遺品もとめ戦さの跡を彷よへばなほかの臭ひ鼻撲つがにも
この草もかの木も花も亡き友の化身ならめとひた額伏しぬ
母そばはかなしも亡き子好みしと吾に持たせし蕗菓子ぞこれ（秋田の老母より）
友よ友らよ目覚めて享けよ同砲の御国の水を酒を菓子をも
友まつる辞とぎれてこみ上ぐる熱きおもひに嗚咽いくたび
亡き友を弔らふとてや習ひにし般若心経いま誦しまつる
このあたり友葬りにし処ならん清酒召せと灑ぎつ、泣く
故地にして御霊祭に寄る子らへ供養なればと供物わかちぬ
兵が幾夜の夢の露営の地水漬き草長け蚊柱ばかり
茶毘だにも叶はず墓標一つなく萬里のはてに瞑るみたまよ
亡骸も焼く煙さえ凄まじき爆弾よぶゆゑ焼きもかねにし
念々に地軸廻してこの国をつひに独立せしいのちかなしも
ニューギニアわれらを載せ来しこの船も骸となりて浜に傾ぶく（妙高丸）
朝焼けの烈しかりにし日々のごと大きうねりに身をまかせをり（サラモア半島へ）
この湾の水漬く屍ぞいく柱花流しつ、涙のごへり（フォン湾海上）
沈まねば大発あはれ赤錆びし膚を今も白波の噛む（マーカム河口）
いくさとは空しきものか濁り河故の如くに流るる見れば（マーカム河畔）
二千二百のみたま鎮もる峻しさにサラワケット山は霽るる日もなし（標高四三〇〇米）
餓ゑ疲かれ熱狂ひつ、爽ふる岩壁攀ぢて落ちのびしはや（サラワケット越え）
夜半に啼く鳥の鋭声に目覚むれば亡き友の数面影に顕つ
明けやらぬうちより瞑めて南の星沈みゆく空を見てをり
戦場に日々聞きなれし鳥の声今朝は明るき空に響もす
また会はむと口には言へどヤンデンの老いの眼に涙光れり

以上は昭和五十四年四月、日本パプアニューギニア友好協会主催の第十八次慰霊巡拝団に参加し、吾が野戦高射砲第五十大隊第二中隊の戦跡である「ラエ」、「サラモア」の陣地を尋ねたときのものである。拙歌ではあるが、多少でも巡拝の様子を、くみとっていただければありがたい。私は今年六月再度、野戦高射砲第五十大隊戦友会としての、「ラエ」、「ラバウル」慰霊巡拝に参加し、二代目大隊長であられた粟屋武氏を中心に、一行十三名は深い感銘を受けて帰国したのである。

さて皆様へのお願いであるが、去年ポートモレスビー在住の友人「アルバート・スヘア」氏（オーストラリア人）を訪問した時、彼は日本軍下士官用の皮製　嚢を私に記念の贈物として渡した。話によれば、彼は当時「オーストラリア」軍人であり、終戦後ウエワク」の「ムッシュ」島に日本軍人は集結されたが、食糧不足に脳む或る日本軍人から、肉が欲しいといわれて、こっそりくれてやったところ、その日本軍人は感謝して自分の　嚢を「スペア」氏にお礼として渡したものだという。　嚢の裏をよく見ると、骨筆のようなもので「窪田一男」と名前があるのに気がついた。ご本人か家族の方にお返ししてやりたいので、お心当りの方はお知らせ願いたい。

（連絡先　新潟県見附市新町二—九—一〇、犬塚剛士、電話〇二五八六—二—〇三九二）

念願の海竜島墓参

元海軍　和田喜一

此度のニューギニア訪問は、私にとって二度目である。第一回は昭和四十八年九月、第八十二海軍警備隊を代表して、遺骨収集団、サラワケット班に参加させていただいた。私はラエからの転進後、カイリル島に渡り二十七特根バカラム中隊（元三十一防空隊）に編入され、長い籠城のあと終戦を迎えた。

この島で亡くなった戦友を思うにつけ、海竜島墓参は私の念願だった。

私達海軍グループ慰霊団の一行二十四名は、五十五年四月二十七日朝、ウエワク港からセピック州政庁の船に便乗してカイリル島に向った。青い海原を、左にウエワク半島を見て船は進む。右前方にはムシュ島、其の向うに見える小高い島がカイリル島である。ウエワク半島は焼土と化した昔の面影は消え、台上には住宅やホテルが建ち並んで見える。たゞ海岸近くの赤土の崖に防空壕らしい跡が二つ、三つ見える。

船はムシュ島慰霊の瀬尾、小出両団員を送る為めビッグムシュ湾に向って行く。この湾は内地送還の復員船を迎えた想い出深い湾である。次第に船が湾内に進んで行くと、椰子の実を拾いに行った大きな椰子林が見えて来た。左の方の海岸には捕虜生活を送った懐しい春日村（ビッグムシュ部落）も見える。椰子の木の間にモロタ葺きの小屋が点々と見え、鏡の様な静かな海面に写る景色の美しさに思わずカメラを向けシャッターを切る。

船は湾内奥の椰子林の海岸に着いたが、桟橋もない。白浜の岸辺にさゞ波が打ち上げ、私達の上陸をうながすかの様である。海岸には水溜りが見え、水辺に赤い牛の群がのどかに草を食んでいる。そこは野戦病院があった所で、其の奥の方は合同墓地があった所である。

無事ムシュ島慰霊の団員の下船も終り、船は滑るように静かな海をカイリル島へ向う。岬を廻って進むと眼前に目的地カイリル島が見えて来た。あの懐しいバカラム広場や、後の見張山の機銃陣地跡も、凡べて見覚えのある緑の山々である。船が進むにつれ軍需部跡や、其の奥の山合いの墓地のある所も見えて来る。船は水道を進む。司令部地区にある教会桟橋に向った。其処にはコンクリートの桟橋があるが、二十米程沖に錨を降し、ボートで桟橋に渡る。私達は教会の人々や、小中学生等多数の出迎えをうけ、教会へ案内される。教会は海岸から三百米奥にあり、その間には草原が広がり、セスナ機の飛行場でもあり、又、学生の運動場にも使用されている。教会の職員室にて昼食後休む暇もなく、丘の上にある慰霊碑前に集り合同慰霊祭を行った。祭壇には花輪や軍艦旗、鯉幟等を飾り、酒、タバコ、菓子など沢山お供えし、テープの読経も厳そかに、境野団長の祭文朗読、続いて全員焼香をして亡き戦友の冥福を祈った。

その後、各自、自由行動と云うことで、私はバカラム視察希望者を案内してバカラムに行き、同時に墓地の下調べをすることにした。バカラム広場の入口海岸の砂浜に大発の残骸があり、水警科員だった渡辺加一団員は懐しそうに、これは俺達が乗っていた船のものだと云っていた。この大発は十九年三月十九日の大爆撃で。三十一防の機銃陣地で隊長以下十数名が戦死した。あの日に被爆したのだと云う。

トラック道を進むと陣地下の丘に教会が建っている。広場を見渡すと、雑草を刈り取り、美しい草原が海岸まで広がっている。バカラム川河口にある部落に行って一息を入れて、奥の墓地に向った。渡辺夫妻、川田夫人と星野通訳、外に部落民と教会から来た小学生等十数名が同行する。この道は川の右岸を切り開きトラックが通れる様にしてあり、両側に溝が堀ってある。現在は人しか通らぬため雑草が生えてしまっている。昔の主計科の所を通り、医務科の下から中隊本部、二小隊兵舎の所から墓地の上を通り三十米も行くと、川が二股になっている所が終点である。川の中には下草が生い茂り通れない。墓地はこの辺ではないかと、記憶をよび戻していると、部落のボーイ達も此所だと云う。全員でお参りして引返した。

バカラム奥の墓地で慰霊祭後（48年収骨29体、44年収骨２体）集骨した墓地です。
左から小出、風間、板垣、境野、和田、瀬尾、今関氏
19年２月から終戦まで60体近く埋葬した墓地です。

三時の船便でウエワクに日帰りする婦人団員達は教会の迎えのトラックに乗り帰って行った。あとは渡辺団員と二人となり軍需部墓地に向った。入口に部落があり、キャプテンが出て来たので、私が片言で「ジャパン、ソルジヤ、インダイ、ブン」と話しかけると「オケ」と云って道を教えてくれた。私を先にして五米後に気味悪るそうについて来る。四百米も左岸の上流に登った所で急に狭くなり其所が病室の附添のいた所である。右岸を下って行くと百米程の所に平坦な場所があり、ここが墓地である。其の下流にも一カ所墓地と思われる所があった。部落近くに製材所跡があり、鉄製の機械部品が残っている。又、同行の小学生が教えてくれたのだが、バカラムと軍需部の中程にある防空壕跡入口に電探のようなものがあった。

三十六年ぶりに、想い出多い地区を訪問してジャングルに眠る戦友に親しく呼びかけ冥福を心からお祈りして来た団員達は、全員興奮して教会へ帰って来た。

其の晩は教会の職員と一緒に食事をして楽しく語り合い、英語を知らない私には、通訳の星野さんを入れての話では、いさゝか歯痒い思いがした。食後スクールの合唱団が私等の為めに歓迎会を催してくれた。大集会場には舞台があり、七、八十名の中、高校生がお揃いのラプ〳〵を腰に巻き、パプア、ニューギニアの国歌から世界の歌を次々と聴かせてくれた。解散後、私達は職員の宿舎に泊めて頂いた。部屋には扇風機がありホテルの様である。窓に防虫の金網が張ってあり蚊などは少い。

夜中、雨音がしていたが、朝になると、からっと晴れ上り、小鳥の声もさわやかに聴え、対岸のムシュ島も本島も美しく、くっきりと見える。この様な美しい平和な所で一生暮したいと思った程である。朝食七時、境野団長、今関、風間、板垣、小出、瀬尾、星野各団員に私と八名でバカラム地区の慰霊に行く。この様に大勢揃っての慰霊に亡き戦友も喜んで頂けると思った。カイリル島最終日は午後一時に出港する船便にてウエワクに戻るため、大変忙しい日程である。先づ最初に軍需部地

区の墓地に向った。前日下調べしておいた所に行き、団長の祭文とテープのお経で、全員お線香を上げてお参りをした。別れを告げて、次のバカラム奥の墓地を訪れ、此処でも同じく、慰霊祭を行った。持参したテープに合せて三十一防空隊の歌を唱い、亡き友に聴いてもらう。丁度帰路についた時、霧雨が降って来た。この雨は別れを惜しむ亡き戦友の涙雨のように思われ、胸がこみ上げてきた。

バカラム部落で、椰子やパパイヤ等をご馳走になり、うっかり時間を忘れ、すでに十一時を過ぎていた。境野、星野、私の三名は案内のボーイと可愛いボーイを供に、急ぎ見張山機銃陣地の慰霊に行くことにした。他の団員は司令部地区へ引上げて行った。陣地の登り口の処に聖母マリア様の像があり、其の横を通り屋根づたいに登って行くと七合目位迄は草原になっていて、其の尾根には昔の陣地の蛸台が七つ、八つある。其処に椰子が植えてあり、五米位高さがある。山頂は雑木林になっているので、案内のボーイに視界の良くなるよう、蛮刀で切開いて貰った。眼下のバカラム広場には赤牛が十頭位見え、左下の方軍需部沖にはモーターボートの音が聴え、白い航跡が見え、其の青い水道の向うに緑の平和なムシュ島が眺められた。其の山頂の陣地跡で戦死した木下隊長以下十数名の慰霊祭を行い冥福を祈りつ、山を下った。

私の悩裏には走馬燈の様に、あの頃の数々の思い出がよみがえる。私は転進中の無残な戦いの中を生き永らえて、此のカイリル島にたどり着き、バカラム中隊の病室係を命ぜられていた時、数多くの戦友が最期迄、母国の平和と望郷を念じつ、空しく散って往った姿が今も想い出されて胸が痛んだ。

思い出多いバカラムに後髪を引かれる思いで帰路についた。

三十一防、八十二警、二十七特根の英霊よ安らかに眠られんことを祈る。　合掌

白道（びゃくどう）

元海軍第八十二警備隊　**渡辺哲夫**

昭和十九年一月二日。連合軍は「東部ニューギニア、グンビ岬」に上陸した。我部隊（海軍第八十二警備隊）鵜飼憲大佐以下一八〇名は、一週間の難行軍の末、暮の二十九日、その近くの「ガリ」に着いたばかりであった。糧食は皆無、毎日の猛爆撃、艦砲射撃に曝され、日に日に、敵陸上砲撃音も近くなった。兵士はマラリア、栄養失調で戦わずして斃れていった。やがてやっと生きているだけの我々が、敵戦車に蹂躙されるのも時間の問題となった。留まるも死、進むも死、陸軍二個師団（一万余）海軍五〇〇名は、乾坤一擲の転進を決意した。

私は暗然たる気持で病舎にゆく。顔面蒼白、瘠せ細った病兵を見ても、治療もできないし、何も言えない。彼等を残して、出発しなければならないのだ。やっと立上れる患者は部隊出発の前日、先行させることにした。

数名の病兵が、よろよろしながら司令に挨拶に来た。懸命に捧げ銃をする兵士に、私は最後のマラリア剤を数粒渡す。早や死相の現れている者もある。銃を背に一列になって、よろめく彼等は、真暗なジャングルに消えていった。

一月二十三日、第二梯団海軍部隊出発の朝、副官柿内中尉と共に、病舎にゆく。数名の動けぬ兵士に、新しい毛布をかけた。唇も乾いて、言葉も出ない彼等の眼は、すべてを悟ったようだ。私は枕元に、そっと手榴弾をおく。これが軍医のすることか、許せよ戦友。

部隊は、前夜敵前決死浮上した潜水鑑より配給された沓下二本の米と、一握りの塩を頼りに未踏のジャングルに掩われた三〇〇〇米の「フイニステル山脈」に向った。どうやら隊列に入っていた病兵は、早や第一日で落伍し、マラリアで顔面蒼白の兵士、血便をたれ流しにしながら必死に部隊についてきた兵士も、血の一滴を使いきって、無言のうちに、二日目にはすべて斃れた。山の小径の両側には、それらの屍体が、大きなまるまるとした蛆に食われて、どこまでも続いていた。その中には、未だ息をしている者も混り、棒のような腕が、かすかにゆっくりと動いて、眼、鼻、口に群がる蠅を追いはらわんとしていたが、大きな蠅は、そのくらいでは逃げもせず、食いついていた。そのなかを誰もがひたすら必死で歩いてゆく。それは動物の生きんとする凄惨な本能そのものに違いなかった。屍体は途切れることはあっても、屍臭はどこからともなく風に乗ってきた。

三日、四日とたって、部隊は三分の一を失った。五日目午前中晴れて白い雲が山なみに浮かび、それを目ざして登高を続けた。稜線を越えて、午後からは下りになったが、俄然かってソロモン海でうけた機銃掃射にも似た豪雨が襲ってきた。装具は水を吸って、倍の重さとなり、やっとついてきた兵士も、泥濘に足を取られて、そのま、動かなくなった。闘志に於ては負けない私も、滑り転れで、どろどろの土の中にはまり、無念、全く手足の自由を失った。

――たゝきつけるような雨が、キラキラと銀色に輝いて見える。今迄の苦しさがすーっと消え、急に楽になった。ああ、自分は死ぬ。最後の時がきたのだ――。どのくらい時がたったのだろう。遠くで「軍医長！」とかすかに聞こえる、体がゆさぶられている。雨は依然として降っているがや、弱まっているようだ。薄暗くなった空間に、見覚えのある髭の田村中尉（のち戦死）の顔があった。彼が私に気付かなかったら、現在の私は存在しなかったであろう。

何年か前の戦友会の会場で、ブナで玉砕した海軍安田部隊の下士官で、戦車砲で片肺を抉られて、補虜になった。今は亡き堂市次郎氏に会った。私はその時の様子を聞きに、東京小山台の彼の自宅を訪ねた。その話のなかに「キラキラした両国の花火を見ているうちに意識がなくなり、数時間後に撲られている感じで、はっとしたら、豪州兵が前に立っていた」とあって、私は思わず、「その光はどんなでしたか」ときき直した。自分と全く同じ経験なのに吃驚したものである。

このことを大学のある会合で話したところ、在席の三井教授（慶大医学部）より、その輝く光は仏教で謂う、死へ通ずる道――白道（びゃくどう）ですよと教えられた。

図書紹介

パプア・ニューギニア
――南太平洋の現状――

激戦の地パプア・ニューギニアの戦後三五年の変化と現状を解説した唯一の図書

B6版　上製本　三六〇頁
定価一、八〇〇円（送料不要）

著者　山口健治　は大蔵省理財局国有財産総括課長であるが、三年間在オーストラリア大使館一等書記官兼在シドニー総領事館領事としてシドニーに駐在し、この地を本拠にパプア・ニューギニアをしばしば訪れ、この未知の国を、民族学的、文化的側面から独立前と独立後の経済・社会・政治あらゆる面で、この国を深く観察し、詳細な資料と調査に基いて、その正確な姿を浮き彫りにしている。

⊙左記に注文と同時に送金願います。

〒151東京都渋谷区千駄ケ谷二―三四―一六
財務出版株式会社
電話（〇三）四〇二―五二五四
○第一勧業銀行青山支店（普通）
口座番号　一二〇〇三九一
○富士銀行青山支店（普通）
口座番号　二七一九五六
○郵便振替　東京七―一九六六三
（料金五〇円）

ニューギニア慰霊への旅

元第四航空軍司令部　伊藤新太郎

待望のニューギニア慰霊祭参加の為、六月十九日成田出発。途中ジャワの首都ジャカルタに立寄り、インドネシア政府のビザを受け、六月二十一日西イリアンジャプラ（旧ホルランジヤ）に到着した。現地にて再び軍の許可をとり六月二十四日、念願のサルミ行は決行されたのである。

慰霊祭参加の方々は、旧軍人四名、遺族五名、作家一名計十名の団体であった。作家は直木賞を受賞された井出孫六氏である。サルミ行を希望された方は私の他に、旧飛行隊浅野氏（愛媛）と遺族の佐藤氏（市川）の二名であった。

サルミはホルランヂヤ転進部隊の前進目標地でありその間は五百五十キロの距離があった。行軍は昭和十九年の四月末より開始し、六月末までに至るというこの転進こそ、将に言語に絶する魔の行軍であった。三十五年を経過した今、その転進路上をセスナ機にて飛ぼうと言うのが私達の願いなのである。

セスナ機（飛行士・ニュージランド人）は、六月二十四日午前十時半、ホルランヂヤを飛び立ち、思い出を語る鷲霊山（五千五百米）を眺め、センタニ湖を一周、我々が夜半転進を開始した道路を先ず捉えた。縁濃きジャングルの中に、一条の道ははっきりと続いていた。然し、その道はケニムで切れ、後は深いジャングルの中に消えていた。果しなく続くジャングルの上空を飛ぶこと約一時間、機はサルミの手前トル河上流をゆっくり旋回し始めた。このトル河こそ、我が戦友の生命を奪い、転進者の最も苦難な所だった。ホルランヂヤより転進開始後一ケ月、我が中隊はこの地点に辿り着く頃は、神谷二等兵と二人のみになっていた。海岸を出られた時は、生きられる喜びで笑顔さえ見せてくれたのに、神谷二等兵もついに椰子の実を食べ合った笑顔を残しつつ、この地に力尽き果てて、永遠の眠りについてしまった。「まだ僕の股に少し肉があります。僕の肉を食べて生き、日本再建の為働いて下さい」私の膝を枕に静かに息を引きとった彼の最後の言葉を思い出した。〃神谷君、とうとう尋ねて来たよ〃と心に言ったとき、ジャングルの上を飛ぶ純白な鳥三羽の姿を見た。陽光を受けて輝く翼は、神々しく私の心をゆすった。彼はきっとこの白鳥に乗って飛んでいるのであろうと思うと、止めどもなく涙が溢れてきた。ふと見ると、同乗の浅野、佐藤両氏の目にも一杯涙が光っていた。

機はサルミ上空を通過し、シハラ海岸に向いつつ、フェルカム河河口上を飛んでくれた。シハラは、第六飛行師団・岡本参謀以下、航空隊生き残りの現地自活の場所である。同行した佐藤氏の兄（少年飛行兵、二十才で戦死）は、このシハラに転進後三ケ月間、九月までは生存していたと聞く。ホルランヂヤのホテルで兄のことを語り、号泣した佐藤氏の姿は今もなお忘れ去ることはできない。

フェルカム河は何事もなかった様に、静まり返ってはいるが、この河もまた、アイルナイ（上げ潮）、アイルトロン（引き潮）の物語を生んだ。神の加護有りと感じたのも、この河の辺りで寝た一夜のことだった。引き潮に流され、海の彼方に浮ぶ兵士の黒い頭〃助けてくれ〃と叫ぶ声が今も聞こえてくる様である。

機は飛ぶこと一時間半、丁度十二時に再びサルミへと戻った。飛行場とは名ばかりでセスナ機がやっと離着陸可能な、芝生の滑走路があった。土人の住居が一軒、飛行場内にあり、洗濯物がひらひら見えるのだから、のんびりしたものである。

海岸づたいに歩くこと三十分、インドネシア警察の案内で、慰霊碑を発見することが出来た。部落の中を通る時、住人が大変に親日的であったことは、この旅をすばらしいものにした一つである。三十五年前に少し覚えたマレー語が、この時に少し役立ったことが嬉しかった。酋長も日本語を上手に話し、〃見よ東海の空明けて〃の愛国行進曲が飛び出たのには、皆驚ろかされた次第である。

碑は背が低かったが、御影石で造られ、日本政府・昭和二十五年と刻まれていた。各自持参の酒、煙草、赤飯等を飾り、ローソクに点灯、線香の煙が漂う椰子の中に全員黙祷を捧げた。祖国日本発展の為とは言え、はかなく散った戦友達、秘境ニューギニアの地に安らかに眠り下さいと祈るのみであった。私達には戦友の死をどうすることも出来ない。

サルミ海岸の砂浜を歩きつつ、形見にと小石を拾い、木片を手にすれば、思い出はせつなく胸を去来し、只黙々と死に赴いた戦友を一人思う。

陸海空合せて十二万余の英霊がこの地に眠ると聞くが、国の為生命を捧げた戦友の真心が、今日の日本経済発展の基礎になり得たものと確信するものである。

セスナ機に乗って、初めてジャングルをさまよった跡をはっきり確認することが出来た。尋ねきて本当に良かったと思う。

祖国日本と離れること五千五百キロ、秘境ニューギニアの奥地の中で、苦しみのどん底に一点の光明を見出し、神の守護とも思いつつ抜け出た不屈の力こそ、はたして何であったのだろうか。

発刊ご案内

田中兼五郎著

「パプア・ニューギニア地域における日本陸海軍部隊の第二次大戦間の諸作戦」

著者紹介　元第十八軍作戦主任参謀
元陸上自衛隊東部方面総監、陸将
現東部ニューギニア戦友会代表世話人
現財団法人　偕行社副会長
現社団法人　日本・パプアニューギニア友好協会副会長

発刊にあたって

過般パプアニューギニア政府の要請に基づいて「ニューギニア地域日本軍第二次大戦史」の英文書を刊行し、ニューギニア政府を始め、関係各国に配布して大いなる評価を載きました。これは皆様ご存知の田中兼五郎氏の一年間に及ぶ労作でありニューギニアの戦場を地域別、時期別に整然と区分しその経過を平易に記述されたもので、従来の戦史に見る広範な戦域と時期を錯綜して記録されたものと比較し、極めて読み易く理解し易い内容となっております。これがため有志間に是非日本文で刊行されたいとの希望が多いことにかんがみ、これを原文（和文）のまま当協会員並びに関係戦友会員中、希望者に対し実費を以って配布する建前で限定出版することにしました。ニューギニア地域に関係し興味を持たれる皆様方に同地域の貴重な歴史書として座右に備えられることを切望して発刊の辞とします。

昭和五十五年七月

社団法人日本・パプアニューギニア友好協会
専務理事　梶塚喜久雄

出版元　社団法人日本・パプアニューギニア友好協会
頒布価格　実費三、〇〇〇円（送料共）
頒布方法　ご希望の方は次のいづれかにより部数明記のうえお申込み下さい。

①現金書留
②郵便振替　加入者名　日本・パプアニューギニア友好協会
口座番号　東京　〇ー一二七八一八
③銀行振込　第一勧銀御徒町支店　当会名義
口座番号　一〇八七八四七

パプアニューギニアの政情について

元41師団二三八連隊　梶塚喜久雄

梶塚喜久雄氏

パプアニューギニアは、従来きわめて親日家であるマイケル・ソマレ首相のもと一般国民大衆もそれに準じてか、極めて親日的であったが、本年三月の政変によってソマレ内閣が倒れ、従来の野党が連合を組み、ヂュリアス・チャン卿を首班とする新内閣が発足した。これがため各方面から「対日政策は、感情は、どのようになるであろうか」と懸念する照会が極めて多い。従ってパプアニューギニアの政情を分析し、おかめ八目的ではあるが、その展望を記して参考に供することとする。

昭和四十八年十二月一日自治政府が発足し、じ来およそ七年間に及ぶ長期間政権を担当したソマレ内閣も、その内容的には、決して安定政権といえるものではなく、ソマレ氏率いるパングー党は、常にそれ以外のいづれかの政党と提携して辛うじて過半数を制して政権を維持してきたのであった。即ち当初は、今回首相となったジュリアス・チャン卿率いる人民進歩党及び副首相となったイアンバケイ・オクク氏率いる国民党と提携し、やがて政策面でこれと袂を分った後は、連合党の半数、メラネシア同盟と手を結んで政権を支え、その間この二年間に既に三度の野党の不信任動議を排除してきたのである。

たまたま本年一月中旬ソマレ首相は、一部の閣僚人事を変更した。例えば従来地方大臣であったジョン・モミス神父を鉱物エネルギー大臣に、国家計画開発大臣であったジョン・カプティン氏を高等教育大臣になどの変更人事発表に端を発し、特にこの両者がブーゲンビル島及びニューブリテン島出身の所謂メラネシア同盟の有力者であったことなども作用して、ソマレ首相の独断、偏見人事であるとして閣外に去った。

それまでのソマレ内閣は、パングー党三十二名、連合党十二名の過半数及びメラネシア同盟を含む無所属二十二名のうちの過半数の支持を得てこれを与党として百八名の国会において、辛うじて過半数を保ち成り立ってきたのである。

しかし人民進歩党と袂を分った頃から、そろそろ長期政権に対する不満、ソマレ首相の強気な自主政策、人事問題等に加えて、かって盟友として行動し途中で離反した野党リーダー、オクク氏の執拗なほどの不信工作が奏功し、本年三月十一日四度目の不信任動議に五十七票対四十九票で敗れ去ったのである。

それは、恰も日本の政界における大平内閣不信任動議の結果と全く軌を一にした形であって、与党はもとより不信任案を提出した野党連合にしても「まさか」といった局面に遭遇したものであった。ために後継首班についてもその決定までについては、いろいろの裏話が臆測されているのである。例えば当然本命と目されたチャン卿が、その名の示す如く混血であることに対する反対論、野党リーダー・オクク氏の出身地（チムブー州）に対する反対論などがそれである。

しかし、とにかくも三月十三日ジュリアス・チャン卿を首班とする内閣は、次のとおりの構成によって発足した。

人民進歩党、首相以下七名、国民党副首相以下六名、パプアベセナ四名、連合党四名、メラネシア同盟三名、無所属一名、計二十五名。

さて其処で連合政権とも呼べるチャン内閣を達観すると、これまた決して安定政権と呼べる要素は、全く無いばかりか、むしろそれぞれの政党が主張してきたお互いに相容れることの出来ない基本政策をオブラートに包み、要するにソマレ政権打倒のために手を結んだことは明らかであって、一触即発の危機を包蔵する連合といっても過言ではない。

何故ならばパプアベセナは、今でこそ「パプア人による政治を」とその基本方針をトーンダウンしているものの、元来はパプア単独独立を主張する政党であり、ブーゲンビル島、ニューブリテン島等の出身議員によるメラネシア同盟は、これまた分離独立論の矛を当面真綿に包んで虎視たんたんその機を狙う集団である。またチャン首相が最も有能な政治家と評して片腕とも頼む副首相オクク氏率いる国民党は、ハイランド地方を基盤として、パプアニューギニアをハイランドの人間で制覇する野望を露骨に表明して憚らないことなど考え併せるとこれらが大同団結する要素は、まさに皆無と見られていたのであった。

たまたまソマレ政権打倒のための方便的連合であって、それは恰もわが国において自民党と共産党が手を結んだに等しく、その瓦解を遠くないと見るのは、ひが目だろうか。

従ってこの政権の前途は、とにかく野合的連合とはいえ、自らの手で政権を掌握した各党が、政権慾に燃え、小異（といえるほど単純ではないが……）を捨てて大同団結する以外には無い。ただし冷静ち密な頭脳の所有者であるチャン首相のリーダーシップが、何処までこれらを取りまとめていけるかが最優先するであろう。

それとともに一敗地にまみれたソマレ氏一派がこのまま泣き寝入りするとは限らず、むしろ近く当然不信任動議を提出するであろうことは、火を見るより明らかである。

この国の法律によれば組閣後六ケ月経過しなければ不信任動議は、提出できないので九月国会に果してソマレ氏率いる野党がこれを提議するか、またどうなるかは、今から興味深々である。

そこで新しい内閣によって対日政策は、どうなるかの問題であるが、私は、基本的には変化は無いし、パプアニューギニアの親日感情が一朝にして悪化するとも考えられない。

チャン首相は、その就任の弁の中で「私は、この大任を果すうえで、マイケル・ソマレ氏のアドバイスと御援助を仰がねばなりません」と語り、かつ日本パプアニューギニア友好協会創立十周年の記念総会に寄せたメッセージの中で、チャン首相は「両国間の平和と友情のため従来と同様お互いに力を尽しましょう」と述べ、基本的に前政権当時の政策を踏襲する意思の無いことを表明しているのである。

ただチャン首相が、ソマレ前首相と大きく違う点は、彼が反面偉大な実業家であるという点にある。即ち従来のソマレ政権が、外国からの援助又は投資についてやや閉鎖的であったことに比し、チャン首相は、ビヂネスマン的感覚から多分に解放的に変化するであろうと見られている。

例えばごく最近三年近くも温められていたわが国某企業の投資プロジェクトが、チャン政権になったとたん許可された事例があるが、両者の性格を典型的に反映したものといえるのではなかろうか。

（社団法人日本パプアニューギニア友好協会専務理事）

＝三十年つづいたこと＝

元十八軍司令部　後藤友作

後藤氏　堀江団長

昭和十九年頃はフインシュハーヘン地区の戦況が益々不利になり同地域で苦戦を続けていた二十師団を主力とした将兵は転進路をフイニステル山系にとり難渋していた。マダンの西方アムロン高地に陣どりニューギニア軍を指揮していた第十八軍司令部も戦略的に無理となり第二の司令部要地として、ウエワク西方四十五粁程のところ、カラワップ部落の奥深いジャングルを選定し猛錦山と名付けて位置することになった。扇状に広がった山系を背にし、巨木が密生した谷あいで究竟の司令部適地であった。先発隊の二百数十名はジャングルの下草や小木を切り開きニッパ椰子屋根の急造小屋を建て並べて後退して来る軍司令部要員を受け入れるべく準備していた。

糧食軍需品の補給係としての私の日常は、先発隊として到着し作業している人員の給与と共に日を追って陸続と到着する人員を受け入れるための物品受領業務で数日おきにウエワクにあった野戦貨物廠に通うことであった。カラワップ司令部よりウエワクまで四十五キロ位で途中ハワイン河を渡渉して往復三日がかりの強行軍は楽な行程とは云えなかった。

難所の一ツは、東飛行場の東「現在ウエワク刑務所のあるところ」にある貨物廠に行くには、どうしても飛行場を縦断しなければならなかった。当時は毎日のように同飛行場は敵機の爆撃にさらされていたので命がけの縦断行で実に嫌なところであった。そのために此処を通過する時刻を出来るだけ夕方に予定して走り抜けることにしていたが、いつも都合良く許りゆかず爆撃に出会う時もあって往生したものである。飛行場内は爆弾の穴だらけで一本の木もなく身をかくす所がないので銃爆撃に身をさらし硝煙と土けむりの中を走り廻り落ちたばかりの爆弾穴目がけて飛び込み避けたこともあった。

或る日の夕方、例によってカラワップよりウエワクまで歩き続けてようやく半島の手前の海岸にたどりつき休んでいる時のこと、西の方より日本機が飛来してウエワク飛行場に着陸する体制になったときに、ロッキード二機がムシュ島東方から低空で突然襲いかかり日本機を銃撃して飛び去った。全く瞬時の出来ごとが頭の上で起ったので驚いた。当然のように日本機は目前の飛行場に突込んで炎上爆破して仕舞ったときの口惜しかったことは忘れられない。翌日判明したところによると軍の後方参謀池田中佐の搭乗機であったとのことで一層の悲しみであった。

十九年五月のことである。アイタペ会戦を目指して二十師団、四十一師団の主力将兵は西へ西へと歩度を延ばしていたし協力する各部隊は道路の構築や糧弾の搬送に全力を傾柱していた。軍司令部内では四十一師団主脳が来部して重要作戦会議が続けられている模様であった。時を同じくしたように敵機の爆撃が近くのカラワップ部落を中心にして連日続けられており前日は司令部近く五〇〇米位の所まで五〇〇キロ爆弾が投下されていたので不気味な予感も漂よっていたことは事実で、空襲時の退避準備はおこたりなかった。

午前九時頃のこと警報も出せない程突然にボイキン方面の山蔭より、ノースアメリカン十数機が爆音を落して襲撃して来て爆弾をバラまきながら銃撃して飛び去った。これが第一陣で連続して各種の敵機が入れ替り立ちかわり軍司令部所在の大ジャングルを猛爆したのである――。前日までマラリア熱発で宿舎のニッ葉椰子小屋で寝ていた私も飛び起きざま本能的に近くの防空壕にとび込んで難を避けたが爆撃の衝撃は物すごく震度七～八くらいであって壕内の土砂は落下するし硝煙が吹き込んで来るし壕の入口は落下する土砂で埋まり十五センチ程の穴となり、生き埋め寸前と云う有様であった。約一時間半位過ぎて敵機も去った様子なので入口の土砂をかきわけて壕より出て見て吃驚して仕舞った。

小川をはさんで各部の小屋が立ち並んでいた大ジャングルの巨木は小屋もろ共吹きとんで、一望の焼野原となり土煙りと硝煙の、匂いが立ちこめて見るかげもない有さまに変っていたのである。つい先程まで寝ていた私達の宿舎も遮蔽用の大木と共に直撃され吹きとばされて装具の切れ端が小屋の木片と共に散乱していただけで何も残らなかったが、一命だけ残った。

軍司令部としての被害は甚大で四十一師団参謀長、伊藤大佐、稲垣参謀、軍参謀の向井少佐、上田少佐、打田少佐、副官の千場少佐を始めとして死傷者八十数名に及び各部の宿舎と共に文書類、装具、器具等の損害は計り知れないものであった。前記参謀達は宿舎横に堀られてあった防空壕に退避したところを直撃され悲しくも爆死されたのである。

過ぎ去って二十五年後の昭和四十四年に至り生還した戦友達による現地遺骨収集時のことになる。丁重に埋葬して来た前記の御遺骨を堀り出し収容するため生存者の土谷歳男氏（元参謀部附准尉）と私は、当時の記憶に基き現地人達の協力を得て堀り返し、堀り返して探し求めたのであるが、二十五年前とはジャングルの様相が全く変っており限られた日程では目的を果し得なかった。一日中の穴堀り作業と共に探し得られず日没前にカラワップ部落の海岸にたどり付き、砂浜にペッたり座り込み無言のまま下うち向いて涙を流していた土谷氏の悲しそうな表情は今もって忘れられない。その後四十五年九月、ウエワクで開催されたメモリアルデーに、日本代表として出席する杉山戦友会長（元十八軍高級参謀）のお供をして同行した折、一日の余暇を得て慰霊する意味で同防空壕跡を訪れた際も前年の不覚を反省しながら調査したが、埋葬地らしい場所は探し当てることが出来ずに帰国したのである。

而し機会は両三度やってきた。四十八年度

の収骨事業である、団員として参加を認められボイキンよりダグア方面地域が受持収骨地となったので、今度こそはどうしても実現しなければ――との執念から事前の調査資料を頭の中に叩き込んで団員の須貝謹二氏（元軍通信隊准尉）と共に立ち向った。当日は堀江正夫収骨団長（元師団軍参謀、現参議院議員）も厚生省係員や他の収骨団員数名と共に参加して早朝現地カラワップ部落奥の防空壕跡地に到着した。前日手配通り部落のキャプテン、コークエイ氏も村人達と共に協力してくれた（コークエイ氏は前回も協力してくれた戦争中からの旧知の間柄である）前回不発に終った防空壕附近のうち、今回は山ぎわ以外には予想出来なかったので最重点発掘地区と定め、スコップを差し込み掘り初めた。同時に私は推積していた枯葉等を払い退けながら見渡すと、かすかに土が浪打って段々になっていることに気付いた。（前回ボイキン川上流での収骨作業時に戦友の遺骨を堀り出した時に見受けられる現象で、埋葬した時は盛り上っている土が年月を経るに従って遺骨のみとなり盛り土が沈下して窪地となりゆるやかな段々になることを知った）。

まさしく遺骨の所在は此処だ――と予感したので全員がむらがって堀り起しに掛った。約七十センチ位堀ったところで第一の遺体に当った。予感適中である。時に午前十時、十九年五月に爆撃されていた時刻であった。遇然の一致とはどうしても思えない奇跡であり英霊が導びいた霊感がそうさせたとしか考えられないことであった。土中に長く深く眠っていた前記六英霊を一同涙ながらにお迎えすることが出来、副葬されていた多数の遺品を調査した結果で該当氏名が判明した訳で帰国後、厚生省を通じてそれぞれの御遺族の許にお帰り願った次第であり、三十年目にして目的を遂行出来た執念とも云うべき一ツの真実である。すべて実名を記しましたことをお許し下さい。

敗軍の兵「兵を語らん」

元第二十師団七十九連隊　福家　隆

一、去る五月二日、友好協会十周年記念大会への参加をかね「マダン」「ウエワク」「山南」の戦蹟巡拝を終えて帰国の機中で、私は梶塚氏とつぎのような話をしたことである。

「戦後既に三十五年、唯さえ少ない生存戦友は年々減る一方である。今からでも遅くはない。何とか生存者一人一人の体験を記録に留めておかねば、あの実相は〝あの山奥に、あの日、あの時、あの侭の姿〟で未だに無明に曝されつづけているご遺骨ともども、歴史の彼方に風化し、東部ニューギニアは永遠に〝知られざれ戦場〟になって終う。しかし、語るは易いが、書くとなると大変、お互テープにでも吹き込んで、先づライブラリーを作ったら……戦友会、友好協会相協力して…」と。そして、私は今さゝやかながら筆を取っている。

二、今回の行を共にした戦友諸兄が斉しく感じたであろうことは……

① なぜ、あんな無暴な戦をしたのであろうか……。考えれば考える程……？　その中で……。

② **尊い犠牲**となった英霊への追慕と憐憫の情は増すばかりである。

③ たとえ、幾十度び死に**勝る難苦**を重ねようと、我々は現に生きている。あんな〝戦は、いやしくも〝人間〟二度とあるべき筈もないし、断じて起すべきではない。

④ **だが**……、戦争は口に平和反戦を唱えるだけで抑止できるほど単純なものではない。自らの命を賭して、その惨烈に伍した者の魂の中にこそ、戦争への怨念、平和翼求への真の叫びと祈りがある筈である。

⑤ 実相は、今や生存者一人一人の〝心と体と頭〟の中にしか残っていない。

⑥ その実相を留める記録こそ英霊への鎮魂、ご遺族への弔慰であり、歴史の真実につながる。と思ったからである。

三、昨今――死者の黙示が歴史のうえに甦るように――との願いをこめて、ガダルカナル戦、ことにその末端の実態が刻明に報ぜられ、訓えられることが洵に多い。

その「ガダルカナル」が、敗戦への序曲であれば「東部ニューギニア」は、これを承けての国軍葬送への終章であっただけに、作戦軍の編組兵力、作戦期間、作戦機動地域、犠牲**者の数**、その何れにおいても規模は、ガ島の**数倍を超え**、只でさえ末端の実相は捉え難い。

英霊と同艱同苦を重ねつゝも、数多くの奇蹟をもって生きた現存者の体験証言を俟つ他はない。

四、防衛庁防衛研修所戦史部は、本年一月苦節二十五年の末、大東亜戦争公刊戦史叢書全一〇二巻の刊行を完遂した。その南大平洋陸軍作戦全五巻を中心に、東部ニューギニア戦が総括的に記録されていることは申すまでもないが、これを素材としての正しい史観の展開のためにも、結果として招来した末端の実態を記録に留めることは深い意義を俣つものとなる筈である。

五、東部ニューギニア戦は、三年の終始にわたり徹頭徹尾の敗軍であった。だが、その責は、第十八軍将兵にあったとは思えない。否、それどころか、あのような状況下においてなお、玉砕寸前に至るまで敢斗しつづけたことは、井本熊男氏（元大本営参謀）が云われるように「**普通の状態で戦斗した軍隊よりも数倍の努力を要したもので、その業績は数十倍にこれを認められねばならない**」筈であるし「死斗まさに空前絶後」と断じてよいと信ずる。

六、こゝで、私のいう敗軍の〝兵〟とは、所謂当時の軍隊の階級をいうつもりはない。作戦の終始、地図の一枚すらなく、果ては補給も情報も絶え、剰え、自らの主体的な判断も主体的な意志も極限された状況下においては、その生活態様にも似て将軍と雖も〝一棋の歩〟にすぎなかったとも云いうる筈だからである。

七、①　本年一月二十日、わが国の総理として戦後はじめて「ポートモレスビー」を訪れた故大平首相の特別機が着陸するやいなや突如として降りはじめた肺然たる濠雨が二時間後の離陸とともにもとの快晴に返ったという。

②　**今回**、ご夫妻で参加された鈴木正己氏（第十八軍軍医部々員、元軍医少佐）が、四月二十六日午前十時頃ポートモレスビーの日本大使公邸前で撮られた写真三枚にのみ（他に約三〇〇枚撮影）現われた明確な心霊現象（心霊研究専門家の鑑定による）

③　翌四月二十七日夜、ご遺族大草未亡人の夢枕に逢髪冷体をもって「ウエワク」よりのお迎えに現われた。ご主人（S20・5・22、ウエワク近傍でご戦死）の霊……。等々、何れも英霊の〝声なき声〟をきく想いである。

ポートモレスビー、マダン、ウエワクには日本車が走り廻っている。この三十五年、彼地は、まさに〝石器時代から明治時代へ〟の感すらした。

これをもたらした尊い英霊の犠牲に手向けて〝兵〟を語ろうではあるまいか。　合掌

歓喜嶺慰霊拝記

元二十師団　古川　治

毎朝拝するわが家の仏壇に、祖先の霊と共に現地で「クイラ」と称ぶ台木に、これも歓喜嶺から持ち帰った石を埋め込んだ、手作りの位牌を祭っている。

表に「東部ニューギニア戦歿烈士の霊」、裏面に同じく戦歿同期十八の俗名を刻んだものである。

バイパの朝

それは昭和四十四年十月なかば、或る夜明けのことである。

降るような小鳥の囀りに眠りから覚めた。背の固い感触で引き戻された現実は、東部ニューギニア遺骨収集団、マダン班長として行動中であること、一週間以上前に基地マダンを出て、エリマからミンジム河谷を遡行し、当面の最大目標、歓喜嶺を目の前にした。部落バイパに在ることである。

四囲に溢るゝ小鳥の鳴く音に誘われて、現地家屋の高床から素足で降り立つ。ヒンヤリとした涼しさは標高七〇〇米に近い高地の故か。

平和な、この底知れぬ静けさの、この地で。かって身近な戦友の大凡を奪う修羅の巷を誰が想像できるであろうか。

加えて、日の出と共に襲う日も眩む日射しの強さを。

やがて身仕度が調うと独立工兵隊出身の樽原氏の景気のいい合図で出発、一行好奇心から自主同行ポーターを加えて二十余名となる。部落を出るとすぐ、削り取られた河谷へ入り、川床の岩伝いに歩き始める。

あった。あるある、貴重なビタミン原であると共に、そのあくの強さから皮膚病カスカスのもとでもあるとされた「カナカ春菊」。歩くこと半日、川床道を離れて山道へかゝると、相変らずの山蛭にたかられ、耳にするだに胸疼く、歓喜嶺鞍部へ達する。

歓喜嶺に立つ

この地で奮戦された矢野格治大隊長によると、末期の陣地は連日の砲爆撃で殆んど禿山化したと聞いたこの一帯も、一抱えもあろうかと思われる喬木林立するジャングル化して終っている。こゝに温湿地のしかも約四分の一世紀の隔りを実感させられる。

ラム草原を望める地点を求めて陵線に副って不抜山側（東）へ移動する。

地表は厚さ三十糎に及ぶ腐葉土に覆われ、比較的行動が容易である代りに、遺品の発見さえ危ぶまれた。これだでは、作業が大変だと気落ちしかけた時、明らかなたこつぼ陣地に出会った。一行を動員して表土を剝いでいくと、出るわでるわ、鉄帽、飯盒、水筒、機銃弾等々。一ケ所に集めて、更らに東進を続ける。

急に南側が開けて断崖に面した地点に出ることができた。

右目前を屏風山、左に不抜山、中央河谷が延びてラム草原が開ける。

この地を主陣地として死闘を繰返した歩七八連隊第二大隊主力。遠くラム河を遡りカイヤピット附近に散った米倉大隊長、初年兵、幹候時代夫々薫陶うを受けた和田(11)谷口(2)中隊長、その他懐かしい僚友の霊安かれと、国旗をかざして永い黙祷を捧げる。

慰霊柱の建立

終日陣地跡を尋ね遺骨の発掘捜索に当ったが、たこつぼにそのま、埋葬されたらしい数体分の外、力を尽した割には成果があがらなかった。

日暮に一旦バイパに引き揚げ、翌朝用意した慰霊柱及び供物祭具一切を予め選定しておいた歓喜嶺鞍部へ担ぎ上げ、祭壇をしつらえ慰霊祭を行う。

香華を手向ける楢原、原両隊員の目は潤んで見えた。マダンを出て九日目、十月十五日のことである。

同行したバイパのカウンセラーに、豪貨の若干を与え、時々の清掃供養を頼んでおく。

歓喜嶺を後に

もっともっと時間をかけて捜索したい思いを残して、マダンでチャーターした飛行機のドンプ白人農場到着予定の明日に間に合わなければならない。

歓喜嶺を後にラム側河谷を下ること、する。石ゴロ川原を、狭い切り通し状の渕をよぎり歩きつゞける。

距離から判断して、入江村、　点村など確かこの附近と記憶を辿っても河勢の浸蝕甚しく、赤膚をむき出した両岸はその端緒をも掴ましてくれない。

その時、石ころに半ば埋もれて、編上靴のはんばり革と、明らかに人の顎骨が水苔色をして発見された。

確証はないが、右頭上は片山中隊玉砕の屏風山、この附近は下条作業中隊の正面前進陣地、右にや、離れて中尾中隊の不抜山、上流は勿論二大隊主陣地。

途中、バワークの酋長がもらした「ジャパンソルジャー　キラウンド　ピニッシュ」。（兵隊さんの遺体は土に帰った）との嘆息が胸に蘇ってきた。

直後襲った猛烈なスコールで、河水にわかに増水し、ポーターの働きで雨の中に急造された掛小屋に一夜を明かすことになる。

「歓喜嶺の戦友の霊が、別れを惜しんでの足止めか」と、しみじみとした夜であった。

おわりに

私共が子どもの頃（昭和五～六年）日露戦争は遠い昔話であった。それも当時から起算して二十五年前のできごとでしかない。

第二次大戦後、既に三十五年。

私共の心の中にいまだ色あせない、いや年毎に益々鮮明度を加えさえする東部ニューギニアの戦が、現代の人々にとって何なのか。風化して終一胡な焦燥を覚ゆるのは、私一人の感懐であろうか。

AIR NIUGINI

パプア・ニューギニア国営航空

●ニューギニア航空についてのお問い合わせは

ニューギニア航空極東支社

日本・韓国地区支配人　岩渕宣輝
日本地区旅行開発部長　石岡正行
宣伝広報部長　結城道子

〒100　東京都千代田区内幸町1-1-1
帝国ホテル　☎03(504)1111㈹5986

ムシュ島訪問記

——日本・パプアニューギニア友好協会創立十周年記念総会参加に際して——

元海軍　小出勝次

昭和二十一年一月ムシュ島ビッグムシュ湾の沖合に待ちに待った第三次引揚船「高栄丸」がその姿を現した。その船尾には鮮かな日章旗見られず、船腹には見たことのない復員船マークが大きく描かれていた。

舷側についた濠軍舟艇から本船タラップを昇ってゆく将兵の姿には嘗ての栄光ある帝国陸海軍精鋭の面影を見い出す事は出来なかった。始めて味わう敗戦のショックと栄養失調とマラリアのため、身心共に極限状態にあり、タラップを昇るのが精一杯といった感じの集団である。

私達を迎える本船乗組員の血色の良い頬の白さが異国人のように見え、妙に感じられた。やっと「高栄丸」に乗船を終えた将兵の青黒い顔には、既に懐しい祖国の大地にしっかと第一歩を踏みしめたかのような安堵感が溢れていた。

もう二度とこの島を訪れることはないであろう、さらばムシュ島よ、この地で眠る数多くの戦友達よ、永遠に安らかにお瞑り下さいと祈りながら、静かに横たわる島を喰い入るように見つめ、別れを惜しむ。

そして、三十数年を過ぎた昭和五十五年四月二十六日ウエワク半島を再び訪ね、山頂を雲中に隠したカイリル島、ムシュ島を、ウエワク半島から遠望している。愈々明日は永い間待望していたムシュ島の土を踏むことが出来るのだと思うと胸が高鳴る。

翌二十七日午前五時四十五分、モーニングコールのベルで起床、直前までスコールがあったので周辺の椰子の木が洗われたように鮮やかさを一層増し、葉先が風にゆれていた。

連日早朝からの行動が続いているが皆至極元気である。今日は愈々最大のイベントを迎えるとあって、どの顔も生気に満ちている。

午前七時過ぎウエワク桟橋前に到着する。朝の空気が爽かで、実に清々しい。乗船するANDRA号は既に桟橋近くに入泊して、私達の乗船を待っていた。附近の住民が朝早いにもか、わらず多数集って物珍らしそうに私達を見守っている。附近の海辺には日本の魚船が二隻程無残な姿を残している。ANDRA号は桟橋にロングサイド出来ないので、船尾から小舟を降ろして四名位宛乗り、本船移乗を始める。約三十分程で移乗を終り、ムシュ島、カイリル島に向け出港する。本船は約一五〇屯程度の木造ヂーゼル船で乗組員は船長を始め総て現地人である。

船は静かなウエワク湾を出て一路ムシュ島ビッグムシュ湾に向う。近づいて来るムシュ島、カイリル島を見つめながら、船内は駐留当時の思い出話が次ぎから次ぎに出て話がはずんでゆく。

私の隊は海軍第二特別根拠地隊増強部隊として、昭和十八年十一月横須賀に於て編成された総数二百余名の部隊である。急拠編成装備を終り、同月末内地出発、翌十九年一月初旬ウエワク上陸、翌二月末ムシュ島に展開した(隊長富井中尉以下約一四〇名)。スープ海岸を臨む高台に十二糎砲台二門を築造してムシュ水道及び周辺海域の守備についていたのである。

当時比較的後方戦線と思われていたウエワク周辺も、私達の上陸以後数旬を経ずして、敵進撃急を極め海空とも完全に敵の制圧するところとなり、戦線の様相は激変した。

十九年四月二十二日、西方から激しい雷鳴のような不気味な砲撃音が終日轟いた。遂に敵はウエワクを通り越し、アイタペ、ホーランヂャに進攻したのである。ウエワク地区は完全に、分断され孤立してしまった。

戦略的に価値のないものと見做されているのか、敵上陸の兆しも無く、何時やって来るか解らない敵の攻撃を待つ間のもどかしさ、その間に、飢餓とマラリアに呻吟苦悶しながら恨みを呑んで倒れて行く戦友、十九年末頃に至ると連日誰かゞ死んで行き、何時か巡り来る我が身の番を待つせつなさ。或る者は発狂し、或る者は自らの命を絶つと云う、この世の地獄の相を呈するようになって来た。

二十年五月敵は遂にウエワクに上陸を開始した。当日は晴天で、いつものように静かな暁方を迎えようとしていた。

この時、何時にないけたゝましい魚雷艇による銃砲撃が開始され、身近に銃砲戦の炸裂音が迫って来た。急ぎ武装を整え、中隊本部前に集合した私達に凜とした隊長の戦闘命令が下達された。

一、敵兵が海岸線に到達する迄砲は発砲せざること。

二、今日こそお前達の命は俺が預った。全員敢闘を望む。

この間にも魚雷艇からの銃砲撃は間断なく加えられ、配備につく我々も今日こそ死に場所を得られるものと、半ば恐怖と半ば血湧き肉踊る感に頬をひきつらせながら夫々の守備位置についた。

何時の間にか砲台陣地前面とウエワクとの間の海面は既に遊弋する敵の戦闘艦で埋っていた。間もなくウエワクに対し激しい艦砲射撃が開始され、やがて此方にも砲門が指向されるものと息を呑んで待ったが、幸か不幸か遂に我が方には指向されず、敵影を目の辺りにしながら又もムシュ島は戦闘区域から除外された模様であった。

同日中に敵のウエワク占領は成功した模様で、それ以後ムシュ島は、ウエワク飛行場に発着する敵航空機の通路となり、常に頭上には爆音があり、夜間は煌々と照明された敵の幕舎が望見される様になった。

このような状況の中で、旬日を過ぎた翌六月、夜蔭に乗じ敵偵察隊十二名がゴムボート二隻に分乗スープ海岸に上陸して来た。我が方に二名の戦死者を出して始めて敵上陸を知り、敵兵と交戦、敵の戦死三名、我が方も、更に戦死一名負傷一名を出した。残余の敵は、ムシュ島の防備状況を偵察して、帰還した模様である。これがムシュ島に於て行われた唯一の陸上戦闘であった。

後日、私は数名の兵と共に、この戦闘で戦死した敵の三遺体を彼等の故国オーストラリアの方に頭を向けスープ海岸に埋葬したが、停戦後間もなく調査に来た濠軍将校にえらく感謝され、又ムシュ島に於ける戦後処理が極めて有利になったと聞き感無量なものがあった。

空は快晴で灼熱の太陽が遠慮会釈なく照らし続けるが頬に当る海風が和らかく心地よい。約二時間程の航海のあとビッグムシュ湾に入る。前面に展がる海岸風景は私達の駐留当時と殆ど変らず、四十年に近い長い歳月の経過が信じられない程で、突然タイムトンネルから出て来たような感じである。

九時三十分頃、私と瀬尾さん(当時小隊長)、岡部さん(財津隊)、星野さん(カンタス航空)と同勢四名を乗せた小船が海岸の砂浜に乗り揚げた瞬間は正に感激の一瞬で、思わず身震いを感ずる。

いつしか海岸に集った現地人達は十名位になっており、その中から英語の出来る正直そうな人達五名を星野さんが案内人兼ポーターとして選んで呉れる。五名は総て十四、五才のボーイたちである。SIMOM、BENNY、LAWRENCE、THEO、ALEXKAMAで、何回か名前を呼んで点呼をとるが、最初のシモン以外は顔と名前が一致せず誰が誰だかはっきりしない。

私達は先づ第一に椰子林の中の合同墓地の跡を尋ね、慰霊を行う。海岸から直線に約二百米位入った椰子林の中の小高くなった所で、椰子がやゝ疎林となり青空が大きく口を開けている。内地から持参した卒塔婆、酒等のお供え物をし、厳粛な雰囲気の中で慰霊文を読みあげる。私達を取り囲むように、見守る現地人は二十名位に達していた。約三十分程で、

此処での慰霊を終り、次いでバーム部落経由でスープ砲台跡に向う。財津部隊跡に向う予定の岡部さんも変更して、私達と同行する。慰霊祭に集まって来た現地人の殆んどが私達と行を共にし、人一人しか通れない細い道を縦列となり、賑やかに進む。後からHAY・MORE・WALK・SLORYと叫びながら息を切らせて続く様に凡そ不様な格好であったろう(平均年齢六十二才)。私達が歩いている道は現在現地人が使用している道で、当時砲台築造のため我々の造った道とは異るのでどの辺を歩いているのか全く見当がつかない。「この道はバームに向っているのか」と何度もボーイに聞きながら、「あともう少しだ」「あともう少しだ」との返事に勇気づけられて、やっとの事でバーム部落に到着する。この間一時間半、同行三名共にすつかり歩く自信を失ってしまった。

この侭あと約一時間歩いてスープの手前で旧砲台跡を探索し慰霊を行ない、来た道を急ぎ取て返しても、残念乍ら私達の現在の弱った脚力では、午後三時迄に迎えのボートが来ることになっている上陸地点に戻り得ない事が明瞭となったので、スープ行きを断念し、このバーム部落で慰霊を行うことにした。酋長の家に案内して貰い、来島の理由と部落内で慰霊を行うことの許可を願い出る。酋長も快諾して呉れ、部落民も総出で参列し盛大な慰霊祭を行うことが出来たのは幸であった。慰霊祭のあと、部落の人々に分けてあげた衣類、タオル、ネックレス等のお土産品は殊の外喜ばれ、どんなにか彼等がこのような品物を欲しがっているか如実に知らされた。

旧砲台跡まで行けなかった事は心残りもするが、必ず次の機会をつくって来島することとして、十三時三〇分頃ビッグムシュ上陸地点に向って引返えす。

帰途は往路とは別の近道を行くと云う事で、知らない道を海岸に向ったが、途中の道傍には農園が散在し、コーヒー、薩摩芋、タピオカ、パイン等が栽培されており、私達が嘗て知っている焼畑農業とは異った本格的プランテーションである。従来の家族が食うだけとれば足りると云う域を越えた、原始生産から脱した近代的生産規模への変化を垣間見た思いがした。

帰りは島の人達ともすっかり仲良しになり、のんびり雑談を交えながら行く。駐留当時、時々私の小隊に椰子やウニの石焼き等を持って来てくれたミスターコマンも、もう亡くなって、久しいとか。終戦となり彼と別れる時「今度、島に来る時は私のためにジャパニーズワイフを連れて来てくれ」と頼まれたことが記憶に残っている。

やがて上陸地点に帰りついたが、迎えのボートが未だ到着しておらず、島の人達がお土産げに持って来てくれたバナナ、パイン等を賞味しながら椰子の木陰でボートを待つ。

南の太陽に映ゆる白い砂浜と碧い海原は見事なコントラストを描き、正にパラダイスの感を深くする。嘗て、飢餓とマラリアに苦しみ、多くの戦友達を失ったこの島での過去と、この現在のすばらしい平和なパラダイスと、どちらが夢だったのだろうかとさえ思われて来る。

もう二度と訪づれることなぞ無いであろうと離れたこの島に、三十六年と云う長い長い年月がかゝったけれど、それ丈けに、亡き戦友達の霊を尋ねて、再び訪れることの出来た喜びは筆舌に尽し難いものがある。

ムシュ島の英霊よ、永遠に安らかに瞑られよ。

合掌

五十五年六月三十日記

雑感——木更津寓居にて(昭和五十五・六)

元航空十二気象隊　小畑市郎

此の稿を書くにあたりニュースにて大平首相逝去の報を知り謹んで御冥福を祈るものであります。誠に人の生命の無常なるものを痛感しています。八十年代人類の世界は変転極りなく、今日ありて明日の予測の見極めは、何人と言えども予見し得ない現状であります。

歳月の流れは早きもの、旧戦場えの亡き戦友の御遺骨収集及び慰霊巡拝に行ってから早や十年にならんとしております。

脳裏に去来するのは三十五年前のあの戦場における昼夜の別なく苛烈なる砲爆撃、加えて悪疫病魔に苦しみ、毎日次々と斃れ行く戦友のあの顔、あの声、今尚眼前に浮び終世忘れる事が出来ません。

昭和二十年戦争終結以来、同胞の日夜堪ゆまざる努力と英知により今日この世界有数の経済大国となりました。然し乍ら、今日の世界情勢は如何でありましょう。東西巨大軍備大国の飽く事なき他国えの干渉拡張主義は止る所を知らず、加えて油の問題、食糧の問題等々一ツバランスが破れたら我が国はどうなる事でありましょう。誠に以て憂慮に堪えぬものがあります。最近我が国の防衛問題について一般の関心は非常に高まりつつあるようです。個人についても自分の家は自分で守る。国に於ても我々が住んでいる国は「我等の手で守る」いとも当然の事ではないでしょうか。

一旦有事の時に外国の人が、日本の国の防衛のため果して血を流し命をかけてまで守ってくれるでしょうか、とても考えられぬ事であります。(私とて他国の守りに血を流す事は拒否する事でありましょう)

現在世界各国いづれの国も自国の防衛についてはそれぞれ懸命の努力をしています。この美しい我等の祖国を次代の子孫に譲るためにも現代の大人達は真剣に防衛について考え之が府広に誤りのないよう努力すべきであると思います。小生も早や老骨の身、老先短かけれど、今日唯今を与えられた仕事に最善をつくし充実した日々を送りたいと念願している次第であります。

遠く南冥の地に散華した亡き戦友の御霊を偲びつゝ、慰霊合掌

終

編集後記

久し振りの会報十号に特集記事を満載して発行することになりました。寄稿して下さいました戦友諸兄の健在ぶりを、皆様にお知らせ出来ることは本当に嬉しく編集させて頂いたことに感謝しております。

過ぎ去った昔日を繰り返して想い出すようですが、お国のため、と云う大原則に従って我々の青春の全部と命を賭けて戦った最も悲惨な「地獄の戦線」彼のニューギニアに投入された十八軍と称した一ツの軍団の将兵は、反攻するマッカーサー軍と対峙して二十二ケ月に亘り間断なく抵抗し続けて祖国えの攻撃を遅延させた結果、全軍の九十三%を失い僅か七%の生還者となって、ボロボロの帰還を得た一万七十三名だけの戦友達も、三十五年という戦後の目まぐるしい歳月の明け暮れには抗し得べくもなく、今日では七千名程となったことは誠に心細い限りであります。

而し、生きていることの尊とさを、実感として毎日を暮しているものは、私だけではないであろうと思っておりますし、連動して忘れ去ることの出来ないのは、彼の地において共に戦いながら不幸にして若い命を散らして仕舞った十三万にも及ぶ戦友英霊のことであり、残されている遺族のことであります。

ニューギニアに眠る戦友達の霊位に瞑目し合掌するだけでよいのであろうか——。各号の会報に寄稿されて来た多くの生存者の記事を拝見していても、生存者として何かを答えなければならないのではないか、と問いかけていることは一致しているようである。

五十五年八月　**後藤記**

昭和五十五年九月発行
東部ニューギニア戦友会　会報第十号
編集・発行人　後藤友作
発行所　東部ニューギニア戦友会事務局
東京都世田谷区砧六丁目三二一五
電話　東京〇三—四一六—六五〇四
振替　東京六—七五一四三番

(無断転載禁)